

なにあ 川柳 この句



橘高薫風

なにわ

川柳

この一句

橘高薫風

カ
ッ
ト
野
尻
弘

序

文

江戸時代に刊行された「柳多留」「末摘花」などの優れた川柳句集のイメージから、また五七五というその短詩としての定型性から、川柳は現在でも一種の古典的な庶民の文学と思われがちなところがある。が、現実には決してそうではない。新しい時代に即した新しい川柳、個性的な川柳作家は戦後も数多く登場し、旺盛な作品活動を展開して今日に到っている。

その一人が「川柳塔」の代表的な作家、橋高薫風君である。

薫風君はもともとあまり頑健な体質の人ではないのだが、最近の薫風君の新しい川柳の普及者・実作の指導者としての活躍には瞠目すべきものがある。

「番傘」の片岡つとむ氏とともに朝日新聞（大阪）の「なにわ川柳壇」の選者を担当してからも既に三年の歳月が過ぎたし、NHKのラジオ・テレビの川柳壇の講師、あれこれの入門講座の講師の他にも、いくつかの新聞・雑誌の選者の仕事を引き受け、多忙な日々を送っているようである。

その橋高薫風君がこのたび「なにわ川柳この一句」という川柳集を世に送るといふ。

内容は、明治・大正の一流作家をはじめ、現在活躍している作家たちを流派を問わず登場させ、彼らの大阪の町々や人情風俗をうたった作品を集大成し、そこに現在の大阪の姿を浮き上らせるのが薫風君の狙いであるらしい。

薫風君は大阪生れの生粋の大阪人であり、大阪の街へのふかい愛情が、折から大阪城四百年祭に当り、この集を編むことを彼に思い立たせたのではないかと思われる。

私も大阪人の一人として、この本がきつと楽しい句集になるであろうことを期待し、上梓の日を待っている次第である。

昭和五十八年清秋

大阪住吉 西華山房にて

藤 沢 桓 夫

頬冠りの中に

日本一の顔



寝転べば畳一帖ふさぐのみ

麻生 路郎

起きて半畳、寝て一畳、人間なんて小さな存在だ。あくせくすることもないし、くよくよすることもあるまいと言うのである。路郎は川柳家だからこのように表現したが、禅林の僧ならばもっと端的に喝破することだろう。この句のリズムに作者の姿を見る。

(7月1日)

頬冠りの中に日本一の顔

岸本 水府

上方第一の名優初代中村鴈治郎の当たり役、紙屋治兵衛の舞台姿を詠んだもので、水府の代表作である。昭和三十三年一月一日発行の番傘五十年記念出版、「定本岸本水府句集」から抄出。この句の瀟洒(しょうしゃ)な句碑が道頓堀中座の近くにある。

(7月2日)

恋人の気弱へピアノぐわんと打ち

中尾 藻介

俳句と違って川柳では、恋の句を詠むことが多い。この句、ピアノをわずかに聞くだけの内気な恋人に業を煮やして、殊更(ことさら)に、ぐわんと鍵を叩(たた)いたのだ。いまいましさを爆発させた現代気質のお嬢さんの様子が、目に見えるようだ。

(7月3日)

牡蠣船が待ち草臥れた眼にうつり

近江 砂人

たそがれ時の逢い引きでもあろうか。待ち草臥（くたび）れた目にかき船がうつる。かき船に灯が入ったので気付いたのかも知れない。辺りは急に都会の夜の生気を帯びはじめる。疲れた身内に活力を呼んだことだろう。現在かき船のなくなった大阪は寂しい。

（7月4日）

子猫ぞろぞろみな宿命の顔かたち

中島生々庵

生まれた子猫の目があきはじめる頃はまことに可愛らしい。それらが貰われて行くのには、雄と雌、器量などが大いに左右するので、猫にさえ宿命を感じないわけにはいかない。と同時に、猫や犬が人間の生活や運命まで変えることが間間あることも見逃せない。

（7月5日）

放浪の町に七夕竹が揺れ

神谷娛舎亭

牽牛・織女が天の川を鵲（かささぎ）の橋によって渡り一年に一度の逢瀬を楽しむ。笹に五色の短冊や願いの糸をかけ、梶の葉へ歌を書いて読み書き手芸の上達を祈る。伝承の行事に行き合わせたエトランゼの目はまことにかなしく、心はひととき家郷に向く。

（7月6日）

法善寺一皮むけてめぐり合い

桑原 狂雨

嘗（かつ）て法善寺の水かけ不動に願を掛けたほどの仲、わけあって離ればなれに暮らさねばならなかった二人が、偶然に出合ったのだ。それぞれ的人生を歩いて来ての上のことで舞台も申し分がない。一皮むけてという表現には長い物語が秘められている。

（7月8日）

黙禱へ日本海の波の音

坂口 芳一

この句、「東郷大将国葬の日」と前書があり、昭和九年の作である。大平さんは去る六月十二日急逝された。昨年の東京サミットではすばらしいホストぶりだったが、ベネチアでのサミット直前の死は残念であったろう。今日、内閣と自民党の合同葬が営まれる。

（7月9日）

通天閣がまっすぐ見えてめしの店

三好 美芳

作家林芙美子は昭和二十六年小説「めし」を完結することなくこの世を去った。ジャンジャン横丁と云われる新世界の界限から筆を起こした小説は、筆太に書かれた「めし」の看板の臭いと味を存分に描写していた。通天閣が象徴の庶民の町は大阪のこころだ。

（7月10日）

俺に似よ俺に似るなと子を思い

麻生 路郎

路郎はこの一句を生むために生まれて来たと言ふ門下生もいた。大正十五年七月十一日に開かれた遅日荘(路郎居)での柳談会で発表された。路郎は明治二十一年七月十日の生まれだから、柳談会の前日の誕生日に浅酌低唱していて句を成したのかも知れない。

(7月11日)

源聖寺坂織田作が出てきそう

早川 清生

生国魂神社を中心にしての高台から、西は下寺町へ下るだらだら坂に源聖寺坂・口縄坂といったいい名の坂がある。代々この辺りに住まいしていた織田作の文学碑が去る一日、口縄坂に建てられた。今日は生国魂はんの夏祭、長身長髪の人と出合いそうだ。

(7月12日)

一歩いずればわれ旅人となる心

西尾 葉

旅好きの作者ならではの思いのする格調高い作で、旅立つ瞬時の心の高ぶりが余すところなく表現されている。この句の句碑が、去る五月十八日の佳日に、河内西国第一番の札所、聖徳太子第二霊場である八尾市の大聖勝軍寺山門脇に建立、除幕式が行われた。

(7月13日)

阪急が見えて旅から帰ってき

正本 水客

旅の終わりは、必ずいささかの哀愁と安堵（ど）がつきまとうものである。阪急百貨店の建物は、殊に旅帰りの大阪市民にほっとした安らぎを与えてくれた。これは戦前の句で、まだ梅田駅近辺に高層ビルが並び建ってはいなかった頃の感懐なのである。

（7月15日）

煌々とすしがぎょうさん売れ残り

須崎 一豆秋

煌々という先鋭なる語と、ぎょうさんというくだけた大阪弁とが同居していてちっともおかしくない句だ。おかしく感じないどころか句意を高める役割を果たしている。近来プラスチック製の見本が多くなって、この句もいずれ難解の句となることだろう。

（7月16日）

昔堺に男ありけり夏まつり

食満 南北

この句は「夏祭浪花鑑」の主人公、団七九郎兵衛を詠んだものだ。義父を殺す泥場が、高津宮の宵祭のだんじり囃子にあおられて延延と続く。言わば、なにわのおとこ気である。この句の句碑が南北の三周忌に、堺の南宗寺に建てられてはや二十一年がたつ。

（7月17日）

北浜に友あり退職金近し

金泉 萬楽

長年勤めあげた汗の結晶である退職金は、あだやおろそかには出来ぬ。北浜に勤めを持つ友人に相談して堅実な利殖を考えようと云うのである。この句の作者は証券会社の役員なので、北浜に関する作品はすべて深くうなずかせるものばかりである。

(7月18日)

美しいコップは美しく叛く

森中恵美子

気に入りの美しいガラスのコップ、こいつは日常座右にあって、私に華やかな夢を持ち続けさせてくれる、とてもうれしい存在なのだ。しかし、傷心にうち沈むときも、こいつは相変わらず陽気で饒舌（じょうぜつ）だ。むしろ軽薄で慰めにはならない。ああ。

(7月19日)

ソロホームマー天の一角稲光

近江 砂人

テレビでホームランのビデオがうつる。投手が投げる。打者がバットを一振する。白球は夜空高く舞い上がり外野スタンドへ突きささる。打者のガッツポーズと投手の口惜しい表情。これらはまさに見事な起承転結だ。転の場面に稲光や月の演出があれば最高。

(7月20日)

院長があかんいうてる独逸語で

須崎 一豆秋

川柳界の一茶、豆秋の絶唱である。川柳求道に徹して人間を練り上げ、ゆう揚迫らず死に臨んだ態度は、路郎が標榜（ほう）した「川柳は人間陶治（や）の詩」を片時も忘れなかった証左であろう。昭和三十六年五月四日、直腸がんの手術後六十九歳で死去した。

（7月22日）

子が出来て川の字形りに寝る夫婦

古川 柳

宝暦八年（二百二十二年前）の万句合の句で柳多留初篇に掲載。前句は、はなれ社すれく、つまり「はなれこそすれ」という題の応募作品だ。子が出来て川の字なりに寝るのは今に変わりはないが、川柳はこういう理にはまった作品から出発したものである。

（7月23日）

金魚屋に舞妓たもとを教えられ

長崎 柳秀

麻生路郎の指導のもとに阪大川柳会が発足したのは、昭和六年夏、水都の華である天神祭の夕であった。会長は薬理学の柳秀長崎仙太郎博士で、教授連の知的情緒が見事に花開いた。句は昭和初期の縁日のにぎわいが色彩艶冶（えんや）に描出されている。

（7月24日）

思い出の橋ばかりなり水都祭

麻生 路郎

水都祭は今年三十五回を迎え、ようやく天神祭の船渡御に絢爛（けんらん）さを加える現在の形に定着した。土佐堀川と堂島川には、天神橋や難波橋だけでなく、梅檀木橋（せんだんのきばし）水晶橋といった趣ある橋が、市民の思い出の中に生きている。

（7月25日）

花火黄に空の重心全く西

大山 竹二

神戸のふあうすと川柳社の鬼才、若い頃には番傘としげく交流した。この句、西方の空に鮮烈な花火が黄色い大輪の花を咲かせた。東の空は漆黒の闇のままである。群衆もひとしく西空を眺めている。「黄」「空の重心」「全く西」、すべて洗練された用語だ。

（7月26日）

いづもやで父たり夫たり子たり

水谷 鮎美

いづもやは大阪を代表する鰻（うなぎ）の老舗（しにせ）で、「まむし」は庶民に最も親しまれる食べ物だ。家族連れで来て、子供たちには父らしく、妻へは夫として、また父母に対しては子の立場から心遣いをする善良な人物像が、和やかな雰囲気にとけ込んでいる。（7月27日）

燕はほん字のやうにとんで行

古川柳

つばくろの飛行の姿は剛直であり優雅でもある。その主翼や尾翼の切れ上がった形は、殊に宙返りのときにひらひらと見えて甚だ個性的である。そのところをまるで梵字（ほんじ）のようだと感覚的に鋭くとらえたもので、直喩（ゆ）の句として上乘の出来だ。

（7月29日）

鮎の口むかし役者の似顔より

川上 日車

「道頓堀」の前書があり、「果太鼓いまや鰻を裂かんとす」の句と並記されている。福田平八郎画伯が晩年好んで描いた鮎と、東洲斎写楽の役者絵の、両者に共通した口の形の面白さを思い浮かべる。日車は大阪川柳界の先駆者の一人、昭和三十四年十一月没。

（7月30日）

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ

麻生 葭乃

川柳で生計をたてようとして苦闘した路郎、その人に仕えた葭乃夫人は、外柔内剛の大らかな性格の持ち主だ。夫唱婦隨の酒も、路郎はムードで飲み、葭乃女史は美味しいから飲むという違いがあった。今年米寿の女史は、なお晩酌を楽しんでおられるだろうか。

（7月31日）

朝の鳥瞰動くものみな大阪へ

早川 清生

大阪を空から見下ろすと、西は大阪湾がひらけているもの、三方は鉄道と道路が市街地に向けて蝟集（いしゅう）し、その上を電車や自動車が蟻の列のように続く。下半の措辞（そじ）はまことに当を得ていて、巨大な大阪周辺の朝の活動的息吹を伝える。

（9月2日）

ラッシュアワーわたしのお乳どこへいた

山川 阿茶

出勤時の電車やバスの混雑は所により殺人的なものがある。アルバイトの学生を駆り出してまで乗客を押し込む情景は、日本以外の国では見られないのではなからうか。揉（も）みにもまれてプラットホームに降りた時、胸のパットが背中に戻っていたりする。

（9月3日）

綴り方貧しき父は母を打つ

岩井 三窓

三窓句集「三文オペラ」の序文で岸本水府はこの句を、「正に初心時代にたたきあげた正直な手法が生み出した新鮮な本格川柳の精華である」と賞揚した。本格川柳なる語を初めて唱えた水府のほめ言葉の通り、物心両面に貧しい父を描写して余す所がない。

（9月4日）

大阪は轢れかけてもよい所

高橋かほる

轢（ひ）かれかけたのは、或いは大阪見物のお上りさんであろうが、この句、根っからの大阪人である作者の大阪礼賛の作品だと言える。一見女形のような風采（さい）は、路郎門での特異な存在で、「花道は相合傘の幅に出来」と相当な芝居好きであった。

（9月5日）

救急車うちの子供はうちにいる

富士野鞍馬

嫌な音を立てながら走って来た救急車がわが家の近くで止まった気配に、親たるものは思わず不安がかすめる。そして、一瞬後に安堵（あんど）の胸を撫（な）でおろすのであった。作者は長らく京都に在住の番傘の重鎮で、古川柳研究家。書もまた堪能だった。

（9月6日）

柳原涙の痕や酒の汚染

吉川雉子郎

やなぎわらは、神田万世橋から神田川に沿って浅草橋に至る街路。昔は古着屋が立ち並び、云云と広辞苑にある。涙のあとや酒のしみに庶民哀歎の名残が深い。雉子郎（きじろう）は吉川英治の若く貧しい時代の雅号。昭和三十七年の今日、身まかった。

（9月7日）

土瓶から茶が出る嘘もすこし出る

川上 日車

まあお上がりと茶の間へ通したような日常性をもつ軽い句ながら、日車の川柳眼がキラリと光る。言葉のやりとりの内にちよいと交じった嘘は、注ぎ足したお茶の茶柱のようなもので毒にも薬にもならず、目の端に止るに過ぎない。楽しい世間話はなおも続く。

(9月9日)

嘘嘘嘘木魚の音もそうひびく

麻生 葭乃

木魚の音、それは単調なだけになおさら心にしみるものである。神妙な顔つきで仏前に座し供養の手を合わせていても、日頃の行いに恥ずべきものがあるとすれば、内心忸怩(じくじ)たるものがある。また形だけで心こもらぬものへの鋭い批判の句でもある。

(9月10日)

台風針路は敵の来るに似て

白石 大観

今日は二百二十日、今年は冷夏だったからか台風の脅威が少なくて済んだ。台風襲来のコースは、戦時中、サイパンを基地に毎夜飛来したB29のそれと酷似している。戦後も数多くの台風で大きな被害を受けた国民にとって、風もまた敵の襲撃に違いないのだ。

(9月11日)

四ツ橋で見て来た星座見つからず

川村伊知呂

九月は空気が澄んでくることで星がいよいよ美しくなる季節だが、肉眼の悲しさと知識のあいまいさから名のある星座もわかりかねることである。プラネタリウムのある四ツ橋の大阪市立電気科学館は、昭和十二年三月の創設以来延べ千八百七十万人が見学した。

(9月12日)

公害を吐けとは仁徳のたまわず

八木摩天郎

堺の素封家。堺をこよなく愛し堺に関する造詣も深かった。「民のたまどはにぎわいにけり」と煙の立つのを喜ばれた仁徳帝の故事をふまえて、企業による環境の破壊と人体への煙害を痛烈に批判した。この句を句碑にという話は強い反対で句が変更になった。

(9月13日)

手と足をもいだ丸太にしてかへし

鶴 彬

この句と同じ昭和十二年に、「万歳とあげて行った手を大陸へおいて来た」「もう綿くずも吸へない肺でクビになる」の作品で、エスカレーターして行く戦時色に激しい抵抗を示したが、十二月特高警察に逮捕され翌十三年九月十四日獄死する。行年二十九。

(9月14日)

敷のしの重しとたっただけで暮れ

武部 香林

香林は路郎の高弟だったが戦後目を煩い都落ちの形で大阪を去った。昭和三十七年の早春四国霊場巡礼に出て阿波国箸蔵山で自らの命を絶った。妻女の若菜も運命を共にする。遺体発見が同年の九月十六日。路郎は「浄土へつづく箸蔵山の雲迅く」と深く哀惜した。

(9月17日)

二人づつ二人づついる中之島

武部 若菜

香林・若菜は川柳のおしどり作家として名をなしたが、盲目になってからの香林の句は殊に胸を打った。「宿替えの荷物となって手をひかれ」「すれちがうものみな風を切ってゆき」「頬にふれるは秋の手のひら」若菜もよく夫に仕え堅実な詠いぶりを示した。

(9月18日)

おき宗に岡部伊都子が草履撰る

服部明陽軒

安政二年創業のおき宗は、今も大丸百貨店南側に高級袋物履物の老舗を張っている。上布を瀟洒(しょうしゃ)に着こなした女流随筆家の買物にふさわしい盛り場の灯に、二つの固有名詞が句に一種の雰囲気を感じている。桂米朝の姿を見かけるのもこの店だ。

(9月19日)

アベニューらしく灯のつく御堂筋

戸田 古方

父祖の代から船場で手広く商いをしていて、言わばほんちであつた作者だが、商売を継がずに教育者となつた。銀杏並木の大通りはアベニューと呼ぶのがふさわしくて、火ともしころには南をさして足が勝手に向く。御堂筋はそういう気分させる大阪の青春だ。

(9月20日)

袈裟衣脱げば毛脛の凡夫なり

若本多久志

彼岸ともなると衣をひるがえした僧がスクーターなどで寸秒を惜しんで走る。いかめしいなりの和尚も袈裟を外し衣を脱げば、煩惱多き凡俗の徒と何ら変わる所はない。作者は更に、大臣や社長も肩書きを取れば人間すべて平等なのだと言いたいのである。

(9月21日)

おおそうか今日は夕刊来ぬ日なり

浅井 五葉

朝刊夕刊に目を通すのが日課となつてゐる生活に、新聞休刊日は時に誠に淋しい。夕刊を探し回つて休刊日であることに気付いたとき、上句のつぶやきとなる。休刊日が増えた昨今、だれもが月に一度や二度は五葉の「おおそうか」を思い出させられることだ。

(9月23日)

山々の姿も平家物語

岸本 水府

大和絵ふうのやさしい山を思わせる。三千院前に住まいされる小塙徳女女史から水府生前のエピソードをよく聞いたものだ。これは昭和十八年の作で、二十二年には「寂光院手桶に花を入れてるす」の佳作があり、水府は大原を好んでよく出かけたらしい。

(9月25日)

友達をみんなだまして南に居

麻生 路郎

居止め来止めの作品は、今ではすっかり影をひそめたが、この作品、路郎のものだけあって、居止めの利点特長が存分に生かされている。友達を撤(ま)いて逢瀬を楽しんでいる大正十五年路郎三十八歳の作。題詠がここまでこなされているのも流石と言えよう。

(9月26日)

酒とろりとろり大空のころかも

麻生 路郎

句集「旅人」の李伯の末裔の項の句。大らかで澄みとおった酔心地、羽化登仙の境が、この句のリズム感から自ら伝わってくる。同じ項には「なあちろりこれから秋に親しまう」「三人が酔へば三人らしくなり」など、酒に因んだ佳什(かじゅう)が多い。

(9月27日)

あたたかい手から冷たい手へお金

田中 南都

旦那さんから丁稚どんへ、資本家から労働者へ渡す金。いや、もっと深刻な、例えば娘を売ったような場面をすら想像させて、金というものの魔性の一端が鋭利に伝達される。手のあたたかさ冷めたさと、貨幣のそれとが、感覚の上で相交錯しているのである。

(9月28日)

○トレルマデカエルナと部長から

川村 好郎

決算期が迫ると、どの会社も実績をあげるべく、殊に金融筋では預金の獲得戦にしのぎを削る。出張の平へ部長から電報が届いた。エコノミックアニマルと言われるだけに、受注にも集金にも、乙旗をかかげたような奮闘ぶり。中小企業の切実さが出ている。

(9月30日)

二階を降りてどこへ行く身ぞ

麻生 路郎

句集「旅人」の冒頭の句、振り出しがあつて上がりのない双六のようだ。二階は青春性の拠点、そこから可能性と底知れぬ虚無の巷へさまよい出る。啄木の「何となく汽車に乗りたく思ひしのみ汽車を下りしにゆくところなし」を思わせる。路郎三十八歳の作。

(11月1日)

電光ニュース大大阪が甦り

近江 砂人

たそがれどき、それは文字通り誰そ彼時で、人の顔かたちの見分けもつきにくくなつて、一瞬の空莫が辺りを占める刻だ。電光ニュースがついた。大阪の中空は先ず一番に活気を呈しはじめる。「電光ニュースあれは螢の行進曲 阪口愛舟」は頬笑ましい句だ。

(11月2日)

聖書一冊菊一輪の二階なり

麻生 路郎

書齋が兼用になつている二階の机の上にはいつも一冊の聖書が置いてある。今は菊の季節とて、白菊一輪端正に活けてあるのみ。黒い皮の表紙の重厚な本と鶴首に挿された真白い菊、この簡潔な取り合わせは作者の高潔な心を余すなく示す。一冊・一輪の効果。

(11月4日)

門標に竹二としるすいのちかな

大山 竹二

肺結核のため長い療養生活を余儀なくさせられた竹二は、いのちを見つめ続けた。自分の命、妻の命、人形や虫のいのちを。「五十より歳をとらねば五十良し」と男盛りを、「大阪をほめてるようではめていず」と大阪を詠んだ。五十三歳の十一月五日に死去。
(11月5日)

長崎は初旅にして磔につく

岸本 吟一

番傘川柳本社主幹の若い日の作品である。一句の意は、平素あこがれていた長崎の町が見られる、それも生涯初めての旅が、悲しいことに磔(はりつけ)の刑につく旅だった。抒情の中に川柳的なもの、痛烈な皮肉がしっかり内在していて、力強い感動を伝えてくる。
(11月6日)

肥前肥後踏絵に暗き灯がともり

松本 波郎

秋灯の最も暗澹(たん)たるもの、そしてまた最も光明に満ちているもの、これほどリアルであってこれほど豊かなロマンをそそる句も珍しい。上五の非凡さが目につく。ゆるぎがないのである。芝居の句の多い作者ゆえ、それからの発想であろうか。
(11月7日)

静物画いくさの日にも世に媚びず

磯野いさむ

すぐれた静物画は、大袈裟に言って人生の伴侶ともなってくれるものだ。いつもいつもそこに掛かっていて安らぎと勇気をくれる。激しい戦争の日日に泰然と動じなかったのも、戦後に民主主義を売る者へ節をまげなかったのも、この画のお蔭のような気がする。

(11月8日)

勝馬に今日の騒ぎが腑におちず

福井野迷路

作者は元海軍軍医中將で東郷元帥の侍医であった。七十を過ぎてから路郎門に加わり辛辣な句を得意とした。この句にしても、競馬で穴だ本命だと人間どもが騒いでいるのは、馬側からすればナンセンスだと見る。菊花賞もタカノカチドキが絶対ではなからう。

(11月9日)

哀別の妻がふりむく洒落一つ

桑原 狂雨

昭和三十一年秋、中座での松竹新喜劇「桂春団治」を見ての作品。春団治をめぐっておたままおときもおときも哀しい女だ。春団治の子を身ごもったおときの出現におたまは身を引く。高津の家を去るおたまへ春団治は底抜けの洒落を投げかける。「晩めし食て行けよ」と。

(11月11日)

旅役者誰の位牌か一つ持ち

西田 当百

旅から旅へのはかない旅役者の哀愁が、一つの位牌で極限にまで表現されている。それは親のものとも子のものとも分ならず、忘れ得ぬ女のものであるとも、思ある人のものとも知れないのだ。肌身離さずにいるそのことで、旅役者は人情劇の永遠の主演となる。

(11月12日)

六角堂幾何学的に暮れて行き

笠原 路生

六角堂は京都にある天台宗頂法寺の俗称で、華道の家元池坊が寺域内にある。八角円堂の法隆寺夢殿の優雅さに比べ壮大な構え。夕暮の陰影の推移が科学者らしいメカニックな眼で、物の見事に描写されている。作者は小児科の泰斗、故笠原道夫阪大教授。

(11月13日)

古本屋美味求真がやっとなれ

後藤 梅志

木下謙次郎著「美味求真」は「料理を一の芸術又は学問として取扱わんと試みたるものなり」との堅い緒言に似合わず、鰻の割き方からすっぽんの捕獲法まで、古今に通じ東西にあまねき博識ぶりに圧倒される。古本屋に売れずにあるのが作者には腑におちぬ。

(11月14日)

お守りの腰もかわいい七五三

高橋 操子

句集「千亀利」所収。作者にはお孫さんを詠んだ句が多い。お守りの腰で、千歳飴の袋をひきずって歩く幼子の様子が目に見えるようだ。「岸和田っ子でござい三つで着る法被」も可愛い。作者の「ちっほけな善意でもよし心満つ」の句碑が久米田寺にある。

(11月15日)

家族湯へ大阪からの電話です

大坂 形水

大阪商人は商売にかけては隙を見せないものだ。家族連れで温泉地に保養に来ていても、商売に関する指示は怠らず報告もきちんと取っているわけで、なかなか抜け目がない。仲居の言葉をそのまま生かして一句をなしたところから情景がじかに伝わってくる。

(11月16日)

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

西尾 栞

これは俗化した温泉ではなく、湯治場といった風情の、木の浴槽（そう）が並んであるような鄙（ひな）びた憩の場であろう。湯けむりの中、肥えた羅漢（らかん）がでんと座っている一方で瘠（や）せて肋（あばら）の骨の見える羅漢が横になっている。用語の周到さが句格を高めていることに注目したい。

(11月18日)

二人羽織顔は大平手は田中

柏原幻四郎

昨年十月七日の総選挙で「大敗」を喫した自民党は、西村副総裁が党内各派の調整に奔走した。十一月六日、大平、福田の間で首相指名争いを演じ、決選投票の後、第二次大平政権が誕生した。そうした醜い政争を痛烈に諷刺したちょうど一年前の作品。

(11月19日)

秋の風針の穴より来る如し

大石 文久

秋の風は激しく荒い。中国で金風といわれ愁風と解される。万物を凋落させる鋭さ厳しさを持つ風との意味なのだ、そういう秋風を、この句は感覚的・思惟的に深くとらえている。飯田蛇笏の俳句、「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり」を思い出させる。

(11月20日)

魂が抜けた楽屋の文五郎

安部 光子

文五郎といえど吉田文五郎。四代目は大阪の生まれ、女形を遣えば絶品だった。昭和三十一年難波掾を受贈した。九十三歳まで生きたので、晩年は楽屋では魂が抜けたような容姿だったので、まるで人形と同じではないかと思わせる面白さがこの句の良さだ。

(11月21日)

祖国脱出は難し流木の沈む部分

河野 春三

革命思想家にしても計画齟齬（そご）をきたしたとき、難をまぬがれ得るのは特権階級だけなのだ。人民はいつでも流木の沈む部分でしかない。作者は、俳句性や川柳性を探究した上で、短詩は本質的に無性であるべきだとの短詩無性論を掲げる革新派の元老。

（11月22日）

市電に生きてたなきがらが酔う

児島与呂志

市電廃止・高速配転という前書あり。大阪市交通局勤務、市電の車掌を二年、運転手を十七年間勤め上げたが、地下鉄の駅員に配置替えとなった。市電との別れを酒にまぎらす作者だ。「子沢山市電で行ける花に決め」にも市電に生きた一家がうかがえる。

（11月23日）

鼓うつ万才消えて秋淋し

服部明陽軒

松竹芸能社に所属していた砂川捨丸、中村春代のコンビは大阪漫才界のユニークな存在だった。鼓をうちながら出演の捨丸は、三河万歳の才藏そのままの風情を感じさせた。昭和四十六年十月十二日の死去に、南在住の作者は深い秋の淋しさを知らされたのだ。

（11月25日）

寄席の灯も大阪の色京の色

桂 枝太郎

素人目には定かでない大阪と京都の寄席の灯の違いも、プロの目には判然としたものがあつたのだらう。北や南の花月、新京極界限（かいわい）の富貴や勢国館の棧敷の情緒をなつかしく思い出させる。東京落語の枝太郎師匠は古典よりむしろ新作物を得意とした。

（11月26日）

新大阪ホテルをぬけて立飲屋

岸本 水府

宿泊の友人を誘い出してのことか。ホテルのグリルなど窮屈なだけだ、先ずは立ち飲屋で一杯と、作者らしい気取りのない交友ぶりが出ている。新大阪ホテルは今はないが、北の盛り場にはビールを夏冬適温に冷やした店など、今もいい飲み屋にはこと欠かない。

（11月27日）

マイナスになる酒じゃとて酒じゃとて

真鍋 一瓢

この句を二度三度口ずさんでいると「お酒呑むなお酒呑むなの御意見なれどヨイヨイ」のヤットン節が口をついて出てくる。「酒すこし飲めば淋しくなるものか 川上日車」は極めて思索的な酒だが、これは庶民性豊かなチャンチキおけさ風であると言えよう。

（11月28日）

年上の女とくぐるてっちり屋

菊沢小松園

今でこそふぐ料理は一般化したがる、昭和のはじめには鉄砲と言われるだけのことはあった。年上の女、すなわち毒婦とは決めつけられないけれど、そこには妖艶の気がまわりついてくる。年上の女とふぐ、冬の
大氣にまで官能のぬくもりが伝わる。

(11月29日)

一本の外はどうでもよいテープ

小林 橙舎

船のデッキと岸壁をつなぐ別れは情緒豊かだ。幾百幾千本の色彩が乱舞する。自分はそのうちの数本を握りしめている。そして、またそのうちの一本だけに万感をこめている。恋人の手にまで血潮が伝わる思いでいる。作者は阪大第二内科の故小林正義医博。

(11月30日)

凡聖一如

元旦のころ知る



凡聖一如元旦のころ知る

麻生 路郎

ほんしょういちによは、仏教語。凡夫も聖者も諸人平等、何ら交わり
ないとの意。「あけましておめでとう」と会う人ごとに新年の御慶を交
わす清清しい心は、貧富僧俗の別なく味わう所のもので、元旦の引き締
まった気持ちそのままの句姿を感得する。

(1月1日)

福寿草松にしたがいそろかしこ

麻生 葭乃

盆栽の松に従う形の福寿草、お正月らしいムードで夫唱婦隨を詠い上
げた言わば明治調の作品といえよう。古川柳に、まいらせ候かしく、な
ど書簡に多く用いられた連語体を使い、視覚的に句の味を整えたのがあ
るが、これも視覚聴覚から句格を高めている。

(1月6日)

尉は古稀媼は還暦わか緑

中島生々庵

作者は日本川柳協会理事長、川柳塔社主幹。昭和三十年の元旦から夫
妻で合作の書画作品を残し、今年元旦作成のを入れると掛軸の数は二十
七点になる。新年の感懐を句と絵にまとめたもので、これは昭和四十二
年の作。人生の一里塚的モニュメントである。

(1月7日)

年の瀬や夢買う列のくろぐろと

黒田 草舟

一九七八年発行の第八詩歌集「早春賦」所収。第二次大戦後に生まれた宝くじは人気も金額も次第にエスカレートして来た。球場を二めぐりもする寒風の中の夢買いの列に、為政者としての目が、複雑な思いが結語に集束されている。草舟は前大阪府知事の雅号。

(1月8日)

鶏の何か言ひたい足つかい

古川 柳

辛酉の歳が明けた。古来この年回りは波乱ぶくみだという。この句、鶏が足で地面を掻くさま、片足立ちで浮かせた足を足掻くさまが、物言いたげであると感じ取ったのである。鶏のじれったい気持ちまでが伝わるように、素朴ながら上乘の表現といえる。

(1月9日)

ひれざけはしのびあう人待つ酒か

近江 砂人

ふぐの鰭をあぶって燗酒に入れると甘く香ばしい味になる。女を待つ間、てっさを肴にちびりちびりとやるのは男冥利に尽きる。ふぐは凍てまさるほど旨くなる。番傘川柳本社前主幹の作者の今日は三周忌。恵比須講の日に死去された因縁を思う。本名夷佐一。

(1月10日)

裾ひいて立てば芸者の壮麗な

奥村 丹路

堺卯や花外楼といった一流の料亭での新年宴会。紋付裾模様の衣裳で島田に結った芸者がずらりと並び、黒塗りの膳を運ぶ絢爛さはいくら金をかけても惜しくないような気にさせる。大正天皇崩御の頃までは、芸者は同じ裾模様の紋付を二枚重ね着していた。

(1月11日)

恩のある人の娘をきらい抜き

清水 白柳

川柳作品の中の優れたものには一篇のドラマが内在する。それは序幕の一場面であったり、終幕の情景であったりもする。この句、新派劇風の恩愛の葛藤(かっとう)をうまくとらえている。昭和二十九年九月下寺町光明寺での川柳忌句会で麻生路郎選「恩」天位獲得。(1月13日)

骨立てたまま二次会へついて行き

須崎 豆秋

忘年会や新年会で、ふと魚の骨が刺さった。何となく咽喉がひくひくする。それでも上役が、これから二次会だというと平社員の悲哀、のこのこついて行く。酒好きの故か、保身のすべか、心理は複雑なのだ。「二次会で土産の鹿の角がとれ 西尾榮」も佳作。

(1月14日)

お祈りをする黒髪の長さかな

北川 春巢

一心にお祈りをしている乙女を背後から見やる温かい目を感じられる。黒髪の長さが祈りを一層真摯（しんし）にする。作者は元大阪市交通局病院長、桃山病院長などを歴任された。「川柳は常識だ」が口癖だったが、この様な情念の深い句をものされた。

（1月15日）

本棚へ衣食削ったのを並べ

市場没食子

句主は元大阪通信病院や淀通信病院の薬局長だった科学者なので、学生時代から多くの書物に親しまれたことであろう。若く貧しい時代には殊更「衣食を削る」実感が濃いものだ。昭和五十五年三月に没食子・カネ女川柳句集「夫婦」が発行されている。

（1月16日）

古稀過ぎて働く私へ税が来る

丹波 太路

句集「傘寿」が発行になったのは昭和四十五年九月だったが、八十歳を過ぎても人一倍頑健で、山道でもでも壯者を凌ぐ速歩だった。月のうち二十八日も各所の句会に出席した記録の持ち主でもある。増税の今年、老人や身体障害者ら弱い者へしわ寄せが来そうである。

（1月17日）

もう未練ないが糸屑とってやり

麻生 路郎

路郎の作品の多彩さは改めていうまでもないが、俠氣、女心の把握に
ずば抜けていた。男との別れを前に最後のやさしい心遣い、羽織につい
ている糸屑をつまみとってやる。句集「旅人」にはこの句に続いて「別
離の言葉に深酒しなさんな」が掲出されている。
(1月18日)

命まで賭けた女てこれかいな

松江 梅里

牧村史陽編「大阪ことば事典」講談社発行に、この句が取り上げられ
ている。川柳としてただ一つの例である。テ(助詞)というのは、とい
うのだを極端に省略した語、とあり、ついで、このテはたった一字で気
持ちをうまく説明している云云の賛辞が続いている。
(1月20日)

もう一人診ないと米の買えぬ医者

河村 瑞川

今年六月に米寿を迎えられる作者は、大正・昭和の二代にわたり医者
を天職として来られた。これは、医は仁術の世の句である。「健保の医
者のへいお次ぎへいお次ぎ 麻生路郎」。かくて、医は算術と言われる
時代になる。長寿国日本の栄光の陰に。
(1月21日)

女なる悲しみおんな酌をする

西村 梨里

戦後、男女同権が謳（うた）われ、ウーマンリブが叫ばれる時代とはなったが、女の社会的地位は未だしと言わざるを得ない。女は宿命のように男へ酒を酌ぎ、茶を汲む。作者は麻生路郎の五女、男勝りの鋭い批判句を得意としたが、父の没後作句を絶った。

（1月22日）

見習いのホステス酌いばかりいる

阿萬 萬的

ドイツ語のアルバイトとフランス語のサロンをないませにして縮めたアルサロは、最も大阪らしい新造語といえる。アルサロは大阪が発祥の地で、昭和三十年五月に南に「大劇サロン」が生まれた。句は、酌に馴れず、話題にも事欠くホステスが、酌の間もわきまえずにいるおかしさをついている。

（1月23日）

心ブラをした日に猫の鈴を買う

安井 久子

安井蜂呂・久子句集「道頓堀」所収の「わがペット」二十句中の一句。「いろいろに鳴いて子猫へ話す親」の句も猫に対する愛情のこまやかさがうかがえる。作者は、道頓堀の開削に功のあった安井道頓の十三代目の子孫。心斎橋筋辺りは故郷のように思えよう。

（1月24日）

みな人のすることゆえに壁画燃ゆ

木下 愛日

句集「愛日」文化剝落五句の中の一句である。求道者である僧も芸術家も、並の人のすることをする様になった。それで、昭和二十四年一月二十六日、電気座布団が因で、法隆寺金堂の、インドのアジャンタ壁画に似た鉄線描きの壁画は焼損した。

(1月25日)

ことさらに雪は女の髪へ来る

岸本 水府

この句に接するたびに、梅川忠兵衛の山口村への道行を想像する。女の黒髪と雪、尖锐な感覚的把握にふさわしいのは、鬘(まげ)に結った日本髪であろう。昭和五年作者三十八歳の作。「雪の字が三つ並べは雪のよう 白井涼花」も感覚的にうなずける。

(1月27日)

雪国の赤いポストを探し当て

三条東洋樹

昭和三十二年六月発行の第二句集「ほんとうの私」所収。同書には三百六十五句が、季節感あるものは季節に従って配列されている。雪に埋まった町での旅人、旅信を認めてポストを探す。白の中にひそまる赤い物体は一種のロマンで、旅愁につながるものだ。

(1月28日)

ふるさとのあのポストから来た手紙

堀口 塊人

川柳文学社前主幹の作者は、旧臘十四日七十七才で死去した。作品、文章、講演と三拍子揃った才能が惜しまれる。六十年間も川柳で日記を綴った。句意は明白で、強く郷愁をそそられることだ。「古切手かつて満洲国ありき」も作者の佳什の一つである。

(1月29日)

病みつぎし印象だけの古暦

西出 一栄

年が改まると暦やカレンダーが一新する。心はずむことだが、作者は古い暦に惜別の情を抱く。それは、病魔にさいなまれた一年の暗い歳月を切り抜けた身のいとおしさからであろう。「女の香抜けてくすりの句う祖母」とともに厳しい境涯に触れた句である。

(1月30日)

銀髪になつたら着たい色があり

本間満津子

この句には夢がある。服飾に対する女らしい執着、銀髪象徴する人間形成の美化完成への願ひも推量出来る。作者は中年から全盲になった境涯なので、人一倍色彩には強い感慨を持っておられるわけだが、一般の立場から解しても句の価値に何ら変わりはない。

(1月31日)

春だソレツ 記者は動物園へとび

早川 清生

三月というと季節の感じがガラリと変る。俳句では二月尽と体裁ぶつた語を用いるが、川柳ではもっと直截(さい)的だ。新聞記者は動物園へ飛んで動物の姿をとらえる。動植物や水のような自然界こそ、人間以上に春を敏感に感じとるからに外ならない。

(3月1日)

人恋えばあわき彩もつ雛あられ

森中恵美子

ひな祭は女の節句、赤と白と緑の雛あられの優しい色に託した、これは可憐な女心だ。「妻あるひとと鎌倉彫のうつくしき」前者が淡い思いの吐露であるならば、後者は中年の恋の心情、鎌倉彫の重厚な美にそくして、深みのある思慕を見事に詠み分けている。

(3月3日)

ふるさとの駅真っ正面に城

久保田以兆

川柳「天守閣」の主宰の句。五十四年三月四日、彦根市城町の円常寺にこの句碑が建った。帰郷した小駅の正面になつかしいお城の天守が見える。いきなり「故里だなあ」と実感させられた記憶を持つ人は多からう。主宰誌に因んで作者にふさわしい句碑だ。

(3月4日)

いつわりを庇うかたちで足袋を履く

窪田久美子

心象を作品に全く表現し得ることは難事だが、それ故にこそ作句は楽しいのだと言える。かがまって足袋を履く格好を「いつわりを庇(かば)う」象と自らを凝視した作者の想は凡庸ではない。それは、着想というようなもの以前のところに起点があるようだ。

(3月5日)

啓蟄の虫より先に代議士め

若柳 潮花

今日は啓蟄(けいちつ)、冬眠からさめて虫けらが穴を出る候だ。改選期を控えた議員は、議会報告とか後援会活動に名をかりたポスターでうごめき始める。舞踊の名取で「虫籠と宗右衛門町の灯へ帰り」といった句が得意の作者には珍しい批判の句である。

(3月6日)

実験例3日本国漁夫とあり

岩井 三窓

広島と長崎で原爆のすさまじい人体実験を試みた米国は、昭和二十九年三月一日、ビキニ海域で今度は水爆を炸裂させた。わが国のマグロ漁船第五福竜丸はその灰を被り、久保山無線長をはじめ乗組員は、またしても放射能の洗札に長らく呻吟することになる。

(3月7日)

恋せよとうす桃色の花が咲く

岸本 水府

水府は明治二十五年二月二十九日、閏年生まれで、この句は同四十四年の作、まさに十九の青春であった。その年、藤村青明・木村半文銭・麻生路郎ら関西の俊英相寄って短詩社を興し、「轍」を発行して川柳の新境地を目指し、意気大いに揚るの時代であった。

(3月8日)

行末はどうあろうとも火の如し

麻生 路郎

句集「旅人」の「恋ごころ」の項の冒頭に掲出の句。この作品も前掲の水府のと同じに作者若き日の一章で、霹靂火の路郎の性格そのものを具現しているようだ。後年、「名をすてて十七八の恋もせむ」と詠んだが、路郎には格調の高い恋愛の詩が多い。

(3月10日)

男皆阿呆に見えて売れ残り

山川 阿茶

作者は現在の東京女子医大を大正八年に卒業、更に京大医学部の選科で女子として初めての勉学を続けた才媛。大阪のど真ん中の淡路町や二ツ井戸で開業、独身を通した。趣味は川柳だけでなく多趣味、歌沢と小唄は名取の根っからのいとほんである。

(3月11日)

予算だけミサイルを撃つ自衛艦

栗林 光夫

わが海上自衛隊が初めて参加した環太平洋合同演習（リムパック80）のミサイル実射訓練は、去年の今日、ハワイ諸島のカウアイ島沖で行われた。一発約六千万円のミサイルは、一億円を優に越す標的機に見事命中、護衛艦「あまつかぜ」は面目をほどこした。

（3月12日）

税重く落日人を嘆かしむ

岡橋 宣介

べらぼうな税身にあまり面白し 昭和五十四年十一月一日発行の句集「熊野」には苛酷な税を憤る作品が多い。作者は昭和八年番傘に投句を始めたが、俳句畑をも歩き、昭和十一年に「旗艦」同人となった。昭和二十四年川柳誌「せんば」を創刊、主宰した。

（3月13日）

恐ろしい夢のふとんを叩き干す

岩田 美代

恐ろしい夢を見た。夢の残りかすが布団に潜んでいないよう、悪魔を叩き出す思いで叩き、日光にさらす。それは、実際の愛恋の悪夢につながるかも知れぬところで、にわかには現実性を帯び読者に吐息づかせる。「まばたいて星は墜死を考える」もユニークだ。

（3月14日）

晩飯に來いと岡山から電話

大坂 形水

新幹線の岡山延長の営業開始は、昭和四十七年三月十五日だったから、はや十年目に入ることになる。三時間かかったのが一時間に短縮された便利さは、会社が済んでから一緒に夕食をといたことも現実に可能にした。時宜にかなったうがちといえる。

(3月15日)

野球拳女に紐の多いこと

山本 一途

類題別番傘川柳一万句集に所収、酒席の上のあそびで、拳に負けた方が着衣を一枚ずつ脱ぎ、裸に近くなって行くスリルに座が湧く。おそらく芸者であろうが、和服の紐の多さに男性は敗色が濃い。野球拳の創始者は松山の川柳家、今は故人の前田伍健である。

(3月17日)

君見たまへ蒨葎草が伸びてゐる

麻生 路郎

まだ少し寒さの残る頃の畑にほうれん草が青青と伸びている。作者は、その些細(ささい)なものに感動を覚えて呼びかける。ほうれん草も作者も生き生きとして清新そのものだ。大正十三年鳴尾での作、「川柳雑誌」を創刊主宰した船出の年であった。

(3月18日)

人のいるとこへ病人座りに来

片山 雲雀

少しは動けるようになった病人が、またしても人のいるところへ出て来ようとする。病人の所在なさ、心もとなさである。「幼稚園泣かしておいて告げに行き」の句も幼児の生態を充分伝えて頬笑ましい。作者は日本川柳協会の初代会長としての功績も大きい。

(3月19日)

奥さんは乍末筆だけのひと

福田 妄夢

男同士仕事の上で親密な交際をしている間柄でも、お互いの奥さんとは顔も知らない場合が多いものである。それでも手紙などには「末筆ながら奥さんによろしく」と書くのが一つの型のようになっている。そのところを軽妙に突いたのがこの句である。

(3月20日)

雑談の前にお布施がさらされる

麻生 路郎

今日はお彼岸の中日、お寺さんのありがたい読経が終わった。和尚はお茶に手を伸ばす。しばし何気ない世間話。その間、お盆にのせられたお布施には無関心のようなだった和尚だが、やおら手にとって押頂く。それは誠に自然で見事なタイミングなのであった。

(3月21日)

葬式で会いボロいことおまへんか

須崎 豆秋

大阪弁は実に複雑だ。その喜劇性は、大阪弁の間延びしたところ、えげつないふんい気、あいまいな味などを合わせ持つことに由来する。「速いかな消えてしまおうと火事見舞」など大阪弁を存分に使いこなした作家は、豆秋に止めを刺す。

(3月22日)

三流館夫婦仔犬を抱いて来る

不二田 一三夫

場末の映画館の週末であろうか。映画好きの夫婦らしく決った時間にやってくる。雑種の犬も抱かれておとなしくしている。まこと三流館らしい。「メリーにごはんやってと歌舞伎座から電話 早川清生」。こちらは有閑夫人のペット、様子はガラリと変る。

(3月24日)

春日遅々として仁王さんねむくなり

清水 白柳

春分の日を境に日脚が延びる。陽気もめっきりと春めき、世間万端間延びたように気だるい。いかつい形の仁王も眠くはないかと思える程だ。仏を守る役目の仁王も、人の心象の変化でさまざまに受けとられる。課題吟の名手が「仁王」で天位を得た作品。

(3月25日)

患者の屁医者は黙って脈を取り

矢谷詩腕郎

去る三月二十二日、神戸で第十六回大陸川柳作家同窓会が開かれ、中国や朝鮮からの引揚げ者約六十名が集って懐旧談に花を咲かせた。作者は既に鬼籍に入られたが、長年仁川に居住、「袂にも一杯這入る春の風」の句には朝鮮の民族衣裳の趣きをも感得する。

(3月26日)

しなびても土筆袴はつけて居た

真鍋 一瓢

四季のめぐりは早い。土堤に土筆の頭を見つけたのはつい昨日のことと思うのに、はやひょろんと伸び切って無様な姿をさらしている。それでも健気な奴だ。ほろほろながらも袴をつけている。擬人法で描写しながら、作者は土筆に自分を見たのかも知れない。

(3月27日)

花生ける花のころもなびかぬ日

藪内千代子

昭和の初期から続いている番傘の女性ばかりの「いざよい会」を主宰する作者の、これは花に托した愛の煩悶である。「免許証お金で買えるけいこごと 岡崎はるを」。今日は千利休の命日だが、茶道も花道も隆盛の一途、宗匠は華やかに脱税の摘発を受ける。

(3月28日)

桜なら堺刑務所今見頃

川村 好郎

お彼岸の頃、四国・九州に上陸した桜前線は毎日に北上し、大阪へは例年四月の上旬に達する。この句、昭和三十一年四月七日、光明寺での路郎選「花見」の天位。刑務所を持ち出したところが川柳眼だ。堺にある大阪刑務所正門前の小公園の開花期は美しい。

(3月29日)

十字架がおかまの胸に垂れ下がる

西川 晃

昭和二十一年の今日、神奈川県の片瀬で死んだ武田麟太郎は、プロレタリア作家として出発、短篇「釜ヶ崎」で庶民の生活を書いたが、釜ヶ崎をはじめ西成界隈を取り上げ続けた一人に、入船町で古本屋を営むこの作者がいる。「立飲みの父を待つ子が立読みし」

(3月31日)

労働歌重役室の窓閉まる

河村 日満

まさに風薫る五月、窓のすべてを開け放つての歓談中でもあるのか。折しもメーカーとして労働者の列が集会を終えての行進、赤旗をはためかせ、インターを歌って近づいて来る気配に、秘書が窓を閉めに立つ。中七がまことによく利いているのである。

(5月1日)

筍は竹になるとは知らなんだ

西尾青一路

「竹の子を竹になれとて竹の垣 来山」のやや理に落ちた俳句の、竹を重ねた趣向に比べ、この句、筍そのものになって驚きを詠んでいるところ、ユーモアの味も直截的だ。一雨ごとに背が伸びて、表皮をはらりと脱いだ感慨は、ある人生に通うものを感じる。

(5月2日)

日の丸よしやんと立てればしやんと立て

林田 馬行

日本中が敗戦のショックから立ち直れずにいる時期の作。作者は叱咤する様呼びかける。しやんと立てているんだから気合を入れて立つんだ、日の丸がしょぼくれるとは何事だというのであり、「抽斗の底に日の丸まだ赤し」と共に作者の気概を示す。

(5月3日)

母の鐘子無し夫婦も聞いて寝る

神谷 娛舎亭

戦後放任主義の子供たちの不良化から大阪全市の母親が結集して、昭和三十年五月五日以来、「みおつくしの鐘」が午後十時に鳴り響くようになった。「みおつくし鳴ったらパパも帰ってや 路郎」「みおつくし大人が聞けばまだ十時 鬼酔」などと詠まれた。

(5月5日)

子のカメラ俺と女房を引つつかせ

大鶴 喜由

明治生れの夫婦は、めったなことにも人前で仲のよい素振りなど見せないのだが、そこは天真爛漫の子供にほだされてのスナップ一枚。夫婦二人っきりで撮るのなど結婚の時からはじめたのだ。「もう少し引つついて」などと言われている様子が目に見える。

(5月7日)

児が追えば鳩は歩いて逃げるなり

須崎 豆秋

社寺にしろ公園にしろ、子供と鳩は和やかな遊び相手だ。人に馴れた鳩は、ヨチヨチ歩きの幼児が追っても心得たもので、飛び立とうとはせず速歩で逃げる。幼児の方がこけたりしてその間合いが頬笑ましい。おばあさんが日陰で見守っている。

(5月8日)

死んだふりして蜘蛛よ淋しがらすな

奥村 丹路

「死ぬふりを子蜘蛛ながらにして見する 細見綾子」は俳句。壁を這うくもを叩き落とすと、たちどころに足を縮めて動かなくなる。死んでないのに死んだふりをする蜘蛛の習性を作者は淋しく見やる。程なく遁走する蜘蛛。蜘蛛よ、悪党らしく立向わないのか。

(5月9日)

熊野灘鯨が見える母の背

岸本 水府

定本岸本水府句集の冒頭に母百句があり、これはその第一句。作者は明治二十五年、三重県鳥羽市で生まれ、幼い一時期を南紀で過ごした。雄大な海の景観と深奥な母の慈温、それは、母の中に海があるとの詩人の発想にもあるものだ。

(5月10日)

主審受けつけず流れる雲を見る

高木幸太郎

エキサイトした野球の試合では、ひとつのアウトとセーフ、いや、ストライクとボールの判定ですら勝敗を決めかねない。審判に抗議をする選手と監督、それをはねつける主審の毅然とした態度。その目に空の悠悠たる白雲が映る。結語の仕立てが格別に良い。

(5月12日)

財布ぶっちゃけて負けさす銭を読み

金井 文秋

商人の仕入れにしろ、現金取引だからさして大そうなものではなく、日常の主婦の買物にもありそうなスケッチだ。とにかく手持ちはこれだけだからもう少しきばって欲しいといったところ。この句、上句の具體的な描写が上々で、駆引きの妙味を捉えている。

(5月13日)

演壇のポーズで被告席へつき

菊沢小松園

国会で堂堂たる施政演説を披瀝したほどの人物が、被告席に身を置く羽目に立ち至った。それでも、えてして演壇でのポーズが出る。矜持か虚勢か。作者は大正末期の十代の頃から川柳をはじめ六十年に近い作句歴、今なお内容のある作品を生み続けている。

(5月14日)

待ったなしの歩にさされたる犬養毅

麻生 路郎

「首相逝く」の前書がある。犬養毅は昭和七年のこの日、青年将校に射殺された。作者は「話せば分る」との首相最後の言葉をふまえて、これを将棋の用語になぞらえ巧みに表現したのである。憲政擁護の首相の死後、軍部の政治的進出は一層強まって行った。

(5月15日)

人間ドック合間く〜に妓が訪ね

井上 湧三

阪大川柳会が発足した昭和の初期から作句を始め、以後、警察病院の院長時代まで続けた。三味線にも堪能で、自ら爪弾きながらの小唄は素人ばなれのした味があった。句も粹人そのものの艶やかさの中に、路郎門らしいしっかりした構成を持つ。

(5月16日)

お化粧を直して女また他人

田中桂太楼

作者は木幡村雲氏に引き継ぎ番傘わかくさ川柳会を主宰する。同会は三十五周年を迎えて、今日心斎橋の大成閣で記念川柳大会を持つ。句は、逢瀬を楽しんだ女が、男との別れをさらりと詠んで哀愁をにじませる。結語の突き放した名詞止めの手柄だ。

(5月17日)

ローマからハガキがとどく仲直り

近江 砂人

作者は川柳界きつての紳士、フェミニストだったから、ローマから旅便りをしたのは作者自身でなかったか。日本を発つ時、些細なことで争いを持ったのであろう女性への優しい心遣いが一句に溢れている。地名の選択がまた何ともいえ丸くて良いのである。

(5月19日)

老人におもぢやなしバラの前に立つ

麻生 路郎

感性の鋭い路郎晩年の作で、心に感じたそのままを言葉に移した形だ。「われ老いしか千代紙を美しと見る」も同じで、色彩艶冶、リズムは無碍。熊谷守一画伯の作品が児童画に似ているのと思ひ比べて、道は異なっても優れた作家に共通した奥義を感じる。

(5月20日)

税務署と聞いて蠅取紙を踏み

吾郷 玲人

昭和二十、三十年代の国民に対する税の査定、取り立ては峻烈を極め、小商人にも手かげんはなかった。突然税吏に踏み込まれた慌てぶりが余すところなく表現されている。蠅取紙も今どき珍しくなったが、体の自由を奪われて喘ぐ蠅はそのまま庶民の姿に見えた。

(5月21日)

佳き友よ我れ亡きあとも噂せよ

阪口 愛舟

愛舟句集「渋柿」所収、昭和二十五年の作。番傘の若手グループは岸本吟一を中心に戦後華やかな作句活動を始め、「河童」「藁(ひこばえ)」などユニークな雑誌を発行する。その和やかさはこの句からも理解出来る。昭和四十八年の今日、四十九歳で死去した。

(5月22日)

御堂筋幅見なおしている夜明け

清水 望峰

昼夜の別なく走る自動車、絶えず横断する人影、さしも大阪のメインストリート御堂筋も、今や手狭の感がしないでもない。ところが夜明けのいっとき、あっけらかんとした道筋を見て、こんな幅があったのかと認識しなおしている作者だ。実感がある。

(5月23日)

知ってるかアハハと手品やめにする

梶元 紋太

昭和四年六月十日神戸で発行された「ふあうすと」は、戦時の中断はありながらも来月号を以て六百号を数える。今日はその記念大会の日。この作品からも推量出来る作者の温厚篤実な人柄、軽妙洒脱な作風は、昭和の柄井川柳翁と呼ぶにふさわしいものだった。

(5月24日)

足洗いし女に履くものをやらす

広瀬 挽郎

売春禁止の前書あり。売春防止法が成立して四半世紀、これは同法完全実施の昭和三十三年の作で、法律が先行して受け入れ体制の整わぬ厳しい世相を鋭く皮肉っている。昭和三十二年岸首相は三悪追放を叫んだ。当時の三悪は、貧乏・暴力・汚職であった。

(5月26日)

教壇を捨て、儲ける気にもなり

福田 丁路

学園の暴力が高校から中学へと低年者層にエスカレートして来た昨今、教育担当者の悩みは深い。この句は三十年も前のもの。「先生に云うたろ先生喧嘩中 山川阿茶」。教職員のストも烈しかった。

(5月27日)

やわくとおもみのかゝる芥川

古川 柳

芥川は高槻市を流れる川。「伊勢物語」に、在原業平が若い頃の二条の后とここまで逃げのびたものの、後の御兄達に取り押さえられたとある。やんごとなき女性を負いまいらせて川を渡る姿は想像するだに官能的で、句もそれにふさわしい表現だ。今日業平忌。

(5月28日)

かくれんば誰も探しに来てくれぬ

墨 作二郎

此処なら見つからぬぞという格好の隠れ場を見付け、息をひそめて、やがて失望へ向う時が経過して行く。隠れたまま寝てしまう程の幼なさでない者は深い疎外感にさいなまれる。これは子供だけの世界ではなく、この様なかくれんぼは死ぬまでありそうだ。

(5月29日)

市場籠持つひとときを女医愛し

土井 文蝶

女医に限らず職場をもつ女性は、平素男性に伍して頭脳を酷使する。主婦一般の仕事である掃除洗濯をはじめ、日用の買物などは二の次だ。それでも女、時たま買物籠を下げて家族の好みの品を求めるとき、心が落着くのである。

(5月30日)

ほととぎす節季を逃げて来た男

魚住 満潮

盆・暮または各節句前などの勘定期、と広辞苑にはあるように、以前は掛け売り・掛け買いが主だったので、節季にはその清算をするのが習わしだった。これは間節季、生駒辺りへの逃避行であろうか。時鳥の声にも俳句との違いが際立っている。昭和初期の作。

(5月31日)

測を這いあがる女は突き落とせ
測を這いあがる男は見ていよう

時実 新子

河野春三は、彼女が妻・母・嫁としての日常性から脱却して「おんな」としての業や作家的地獄を文学の上に晒らし、それによって作者自身の心が浄められる言わばカタルシスだと解釈している。この二句、相反しながら相和している。

(8月1日)

雷のお詫びのように虹の橋

榎本 聡夢

夕立のあとのからっとした空に美しい虹がかかる。雷は、太鼓を背負ってお臍を取りに来そうな雷さん。大津絵にある、太鼓を落として釣り上げようとする雷さんで、虹もお伽話に出てくるそれだ。中七が句のポイントで、作者の心のやさしさが虹の色に残る。

(8月2日)

モンロー忌聖なるものは遠くなる

中尾 藻介

マリリン・モンローは八月五日この世に別れを告げたとされる。モンローウォークにハスキーボイス、セクシー女優としての第一人者の地位は今だに微動だもしない。この日モンローの写真の前で般若心経を誦して在りし日を偲ぶ作者は、大正ロマンの権化だ。

(8月4日)

ぬぎすててうちが一番よいという

岸本 水府

昭和十七年、水府五十歳の作品。旅行をしても芝居を見ても、家に帰って衣服を脱ぐとき、人はだれもやれやれという気がするものである。四十年七月七日麻生路郎が、八月六日岸本水府が続いてこの世を去り、大阪の川柳界は震撼した。今年十七回忌を迎える。

(8月5日)

原爆砂漠恥毛を蠅に晒されて

中津 泰人

ピカッと光ってドンと音がして何が何やらわからずに「ピカドン」と言い伝えた。「太陽と地球が衝突したのかもしれないと一瞬思った」と言う女子動員学徒は、素朴だが真剣であった。句集「慟哭」の一節である。「ヒロシマ忌雲がおばけの貌になる 泰人」

(8月6日)

子よ許せ原爆受けし母なれば

石原 菁子

爆心地近くで被爆した作者の二十年後の句で、白血病との自覚が日記に誌されているという。次女が視力障害で手術を受けることになった時の苦悶で、このように闘病中の自らを責めた。膀胱癌のため四十四歳で死去。夫君は川柳「ひろしま」主宰の石原伯峯。

(8月7日)

涼み船水の深さをききたがり

麻生 路郎

水の都の名をほしいままにした大阪では、堂島川・土佐堀川から中之島の剣先へかけてが三絃をかき鳴らす涼み船で随分と賑わった。船納涼は江戸も昔から盛んで、吉野丸・川一丸など名だたる大屋形船があり「吉野丸これはくくと洒落て乗り」の句も残る。

(8月8日)

凝固せる被爆の石を教材に

辻 蝸牛

被爆後三十六年、作品もようやく絶叫型から可成り客観性を加えて来た。作者は長崎の高校教師。しかし今なお「薬包紙捨てず書き込む被爆の詩 公文玉子」「原爆が身寄りなき老いにしてしまい 原田明春」と現実に呻吟する人の多いのも事実なのである。

(8月9日)

みな呑んでるぞビールが散るぞ夏

麻生 路郎

風の涼しいビルの屋上のビアガーデンに足を踏み入れたら、この様な情景が目飛び込んで来る。「みな呑んでるぞ」も「ビールが散るぞ」も軽快な言回しだ。ジョッキを鳴らしての乾杯も楽しさいっぱい。「ビールの泡を吹いて話をそらす気か 路郎」

(8月11日)

草市ではかなきものをね切りつめ

古川 柳

精霊会を控えた旧暦七月十二・十三日の両日には、江戸の各所で精霊棚を飾るくさぐさ（菰むしろ・蒲の穂・草花など）を売る市が立った。句は、先祖の霊への手向けの、どれをとっても二文三文ほどのものを、まだまだ値切る人間の胸欲さを衝く。

（8月12日）

鬼灯は亡母よ亡母よと赤くなる

高橋 夕花

俳句で、ほおずきは秋の季、青酸漿は夏の季である。庭の隈のほおずきの袋状の萼がだんだん色づき出すと、亡き母がしきりに思われる。漿果を口に含んで美しい音を出した母、その音は、今にしてこの世のものではないようにも思えてくる。母への慕情。

（8月13日）

泥棒の逃げた窓から首を出し

菊沢小松園

現場検証に來た警官をはじめ、家人も近所の人も、泥棒が逃げたらしい窓から一様に首を出して見るおかしさ。それは「ほととぎす鳴きつるあとにあきれたる後徳大寺の有明の顔」と四方赤良の狂歌に詠まれた実定卿に似たしまらぬ顔を想像させるのである。

（8月14日）

お月さんざんねんながら負けました

須崎 豆秋

敗戦の前書がある。作者は、昭和十六年十二月八日の日米開戦に際しては「モヤ／＼がいちどに晴れたみことのり」と、その日の感激を叙した。終戦時の感銘深い句は多いが、「醤油が瓶に半分世が移る 岸本水府」には、当時の食生活までを思い出させられる。

(8月15日)

宇宙船の真下日本は盆踊り

青木 三碧

去る十一日の払暁、気象衛星のひまわり2号が打ち上げられた。日本としては二十三番目の衛星で、広い宇宙には数多の宇宙船や衛星が飛び交う。地上では日本列島挙げての盆踊りに、平和を謳歌する。世の進化和古来からの風習の対比に平和の願いがこもる。

(8月16日)

アッパッパ恋の勝利者とは見えす

市場没食子

婦人の夏の簡単着をアッパッパと言うのだが、アッパッパを着てじだらくな格好をしているのを見ると、親の反対を押し切ってまで添い遂げた頃の、情熱の片鱗さえもうかがえないのだ。「扇風機の代りを妻がまだつとめ」にも作者持味のユーモアがこぼれる。

(8月18日)

応接間の金魚逆立ちしてみせる

西尾 栞

応接間で待たされている間の、やや緊張気味の訪問者をなごませてくれたのは金魚だった。蘭鑄の類いの、美しいドレスを着た、見た目にも鮮やかなマドンナで、この家の亭主に代わってサービスをしてくれたのだ。「挨拶のものをもらった声になり 栞」

(8月19日)

蜆の實臍に似ている人の臍に

川上 日車

簾越しの涼風を部屋に入れ、猿股一つになり、冷奴でビールを傾けるのが一番の消夏法だ。そういうとき、わが臍の親しさに気付く。作者は、味噌汁の蜆を食し、その肉が人の臍に似ていると実感した。

(8月20日)

謹厳の彼も人の子プラスなり

布施 筑川

阪大川柳会で活躍した教授に布施信良医学博士がある。平素、謹厳そのもので信望を得ている人物のワッセルマン反応は陽性であった。彼も人の子、木石の身ではなく、凡情の持主なのだ、という意味。省略法でズバリと人間性を剔抉した佳句である。

(8月21日)

甲子園夏が終った赤トンボ

小浜 牧人

甲子園の夏は毎年、高校野球でフィーバーする。今年も八日から四十九校が熱戦を展開、筋書のないドラマでファンを魅了した。栄光の頂点に立ったのは報徳学園。連日歓声に湧いた銀屋根に群れる赤トンボを見ると、甲子園はすでに秋色。

(8月22日)

吊皮も西成線は油ぎり

後藤 梅志

昭和三十五年四月二十五日、大阪に環状線が運行されるまでの国電は、大阪・天王寺間の城東線と大阪・桜島間を往復する西成線とであった。当時、西成線は此花区の工業地帯へ通う工具の通勤電車の観を呈し、活かに溢れていた。それでこの句が生きる。

(8月23日)

颱風の街へやっぱり渡り鳥

神谷凡九郎

台風の吹き荒れている間は何処にひそんでいたのか、燕が電線に何百となく並んでいるのを見ると、南へ飛び立つひそやかな覇気までを感じさせる。日本で孵った雛が成長するにつれ、北から次第に関西の地に集結して来るものようだ。

(8月25日)

ワンマンカーやもめ暮らしに似ておかし

麻生 路郎

大阪市交通局のバス路線に無車掌車が初めて走ったのは昭和二十六年六月のことで、三十年が経過したことになる。今はワンマンカーばかりだが、女性車掌の消えた当座は勝手の違った思いを抱かせられた。やもめ暮らしとはまことに当を得た諧謔の味である。

(8月26日)

バケツリレー原発室で甦る

古川 鶴声

スリーマイル島での原子発電所の事故に肝を冷やしたら、膝元の敦賀原発でも廃液洩れの事実があった。しかも、その処理が、放射能に身を挺してのバケツ処理だったのには、開いた口がふさがらなかった。昭和三十三年の今日、東海村に初の原子の火がついた。

(8月27日)

引金に指掛けたまま説く平和

麻野 幽玄

アメリカはソ連との力の拮抗や、失業対策などの国内の重要問題を抱えていささかあせりが見える。レーガン政権は、中性子爆弾を製造配置し、この十九日にもリビア空軍機二機を撃墜した。銃の引金に手を掛けていては真の平和はもたらされない。

(8月28日)

なんという虫かと仲がなおりかけ

食満 南北

愛人とのいさかいに双方気まずい思っているとき、ふと虫が鳴き出した。「何という虫かな」と男が思わず声に出す。女は沈黙を続ける。答えるとすねた今までの思わくが無になってしまふ。だが、虫の音に気持がほぐれて、仲直りは時間の問題であろう。

(8月29日)

長かった短かったと夏休み

河井 庸佑

どこまでエマニエル坊やにせまれるか、というクロンボ大会も済んだ。今や宿題の追い込みに懸命の生徒たちだ。今年はポートピアの絵日記が多いことだろう。子供には子供たちの感慨がある。作者は小学校の先生。

「間違いなやと宿題母にさし 西森花村」

(8月30日)

可愛らしい目になって来た酔うている

中島生々庵

舞妓や半玉の衿元には、固い花の蕾を思わせられるのだが、多少なりと酒が入ると、目もとがほんのりと色めいてくる。すると、部屋の空気がまでが和むようなのは酒の功德というものであろう。男冥利に尽きる句だ。「迷子札妻は俺にもつけたがり 生々庵」

(10月3日)

色即是空スプートニクが飛び

河相すゝむ

作者は東北大学で本多光太郎博士に金属学を学んだ。物質文明の頂点をなすスプートニク、それさえ般若心経の根本教義に照らせば、色即是空の空でしかないと観ずる。一九五七年の今日、ソ連は人類最初の人工衛星を打ち上げ、宇宙時代の幕を切って落した。

(10月4日)

住み侘びて尙灯のともる戎橋

河村露村女

作者は「大阪に生れて、大阪に育った私。娘時代の楽しみは、まさに戎橋の魅力にあった。その頃の思い出があつてこそ、今の暮しに耐えてゆけるともいえる」と、終戦から夫君帰還までの四年の苦闘を綴った句集「船還るまで」の中で自解している。

(10月6日)

まぼろしの捕虜がつらなるいわし雲

伊東 静夢

「まぼろしの兵団が征くいわし雲」を昭和四十七年十二月に発表した作者は、今年の九月「捕虜がつらなる」と中七を変えて発表した。情景鮮烈、意気軒昂たる美的感覚の句から、反戦の意を内蔵させたのには、九年を経た政治の推移を思わずにおれない。

(10月7日)

お身ぬぐい大仏様のお手に乗る

高橋 操子

東大寺大仏殿では毎年の八月七日、お盆を迎える前にきれいにしておしあげる意味で、大仏様のお身ぬぐいをする。僧の一人はお手の上に乗って、箒で埃を掃く。孫悟空が雲に乗り大空をかけても所詮は仏の掌から出られなかったという古い話を思わせる。

(10月8日)

河童起ちあがると青い雫する

川上三太郎

作者は若くより井上剣花坊門の鬼才と称された。昭和の初期、小川芋銭の絵や芥川竜之介の小説で、河童というものへ世間が興味を持ち始めた頃出された、「河童集」という刷物にある連作の句で、「河童月へ肢(あし)より長い手で踊り」と自己の孤影を表出した。

(10月9日)

ひんぬいた大根で道をおしへられ

古川柳

十月十日は大根祭である。大根の年取とか年越とも言って、大根畑に入ることを忌み、この日までに大根を抜き取ってはならないとする地方が多い。それはこの時季にぐんと大きくなるからだ。「大根引大根で道を教へけり」は七番日記に後出の一茶の俳句。

(10月10日)

二人三脚すめば何でもない二人

上野山東照

運動会たけなわの秋、そこここに歓声が挙がる。二人の男女、肩を組んで、お互いの内側の足をくくり、氣持を合わせての二人三脚の競走に、呼吸のいいところを示したのであったが、競走がすめばそれまで通りに別れ別れとなる。いささかの哀愁が残ったのであった。

(10月11日)

秋ざくら痛みをわかち合っている

河野君子

コスモスの花は白色や深紅色のもあるが、淡紅色の花が一番多いので秋桜というのだろう。背丈が高いせいで青い空にまことによく映る。台風が去った後、乱れたままに可憐な花をつけている様子は、まさに痛みを分かち合う姿で、作者憔悴の心に適った。

(10月13日)

四季の花咲かせ一軒立退かず

黒川 紫香

近辺の民家が立ち退きを強いられた中に、一軒だけがかたくなに抵抗している。それがこういうケースにありがちの激しい形のものでなく、花を植えてのありように、ユニークなこの家の主の人物像と、かえって静かな不退転の意志がうかがえることである。

(10月14日)

力ある眉をうつした日本刀

岸本 水府

日本刀を三尺の秋水というが、とぎすまされた光芒一閃の冷やかさに、男は魂を奪われる。「力ある眉」から、昭和四十五年十一月二十五日、市谷の自衛隊でクーデターを呼びかけたものの、計画失敗に帰し割腹自殺した「憂国」の三島由紀夫を想起する。

(10月15日)

赤い羽根良民証のように付け

斎藤 清幸

岸本水府の鞆持ちを自認していた作者は番傘誌の編集にも力を尽くした。句会に於ける呼名(句が入選した時に名乗りをあげること)の発声に特長があった。句は、共同募金の一片の羽根が、軽い意味の免罪符の役割をする心象を言ったものである。

(10月16日)

あの頃の五円が残る貯金帳

福永 泰典

古い机の引出しから古色蒼然の貯金帳が出て来た。残高の五円はあの頃には一日豪遊出来る金額だった。あの頃とは袴をはいて飲み歩いた頃なのだ。作者は後年本名の清造を名乗る。今年の五月脳こうそくのため七十四歳で死去。京都川柳界の重鎮だった。

(10月17日)

スピーチを考えながらテキを切り

麻生 路郎

只今結婚シーズン、しかも大安の日曜日とあって、今日あたり結婚式場はラッシュであろう。「銀婚を迎えようとする私ら夫婦さえ、揃って海外旅行が出来ないでいるのに、新婚第一歩で豪華な蜜月旅行をするとは何事」と頑固ぶりを披瀝しようか。

(10月18日)

釜めしをよそうやがては人の妻

岩井 三窓

小さなお釜に一人分のかやく飯が入っている釜めし、勿論のことぬくぬくほこほこ温かい。男女さし向いで食べるとままごとのようだ。茶碗によそってくれる女も自分の妻にはならない人なので殊にその感が強い。三十をいくばく過ぎてのままごとのわびしさ。

(10月20日)

にぎりめし母の祈りのかたちして

小出 智子

志を抱き男子郷関を出づるとき、故郷の見える峠で食ったにぎりめしの味は生涯忘れられるものではない。母の手で握られた拳大の白い飯は祈りがこもっていて、思わずその上に涙を落す。この様な情景は舞台で演じられることはあっても、すでに滅びた。

(10月21日)

名は忠孝全国指名手配なり

魚住 満潮

忠孝一本の思想が国中を支配した時代に生まれ、立派な名をつけられたものの、戦は敗れた。世に合わぬ名前と同じに、性格も世のすね者となり遂に犯罪者となる。全国指名手配なりの措辞の効果もさりながら、作者の鋭い風刺精神には感嘆のほかはない。

(10月22日)

税務署で冗談をいう出前持ち

高杉 鬼遊

出前持ちは税金の調査を恐れることもないので、税務署で冗談の一つも飛ばして平気でいられる。一般人にはうらやましい限りだ。「税金に医者も病気になるらしい」「渡り鳥お前も日本で汚れたか」などの作品にも、社会派作家の面目がよく出ている。

(10月23日)

柿の木に河内訛の子が一人

堀口 塊人

この句、昭和三十四年十月、大阪美術倶楽部での川柳文学社の例会に於ける軸吟である。題は「柿」。因みに高位句は「不味そうなかキ一つ 画き武者小路 長谷川三司」選に先立ち、間の問題を取り上げ、字余りの句にもそれなりの理由があることを話された。

(10月24日)

ふるさとは大仙陵のあるところ

八木摩天郎

この句の句碑が昭和四十八年十二月二日、堺市大仙町の仁徳天皇御陵前の広場に建立された。作者は「古川柳に詠まれた堺の人々」という冊子を著すなど堺への造詣が深かった。早稲田大学文学部の出身だが「数学に父の威厳はなかりけり」

(10月25日)

ひとり来てふたりで来たい浪の音

小田 夢路

この句和歌の浦で詠まれたもの。名所を訪うた感慨は誰しも同じらしく、その後も「ひとり来てふたりで来たい山の宿」という風な下五を替えただけの句がしばしば出現する。「この辺の空気を見えるようにほめ 西尾栞」山や海の四季とりどりの味が空気にはある。

(10月27日)

悪人の遠い記憶にある絵本

石川 勝

幼い頃に読んだ明るく純粹な絵本の一こまが、現在置かれてある暗い環境の脳裏に想起される。この明暗、善悪の対照は、トンネルの闇から出口の小さな光明を望む形をしていて温かだ。本が人に与える不思議な影響力と、作者自身の善が句の裏に存在する。

(10月28日)

万巻に通じて恋はうぶなりき

尾崎 方正

専門の医学書はおろか、和漢洋の書物を読破した知識人でありながら、実際には、女性の扱いに関してもうぶで、口一つ利けないという学究肌の人物を描く。作者は阪大医学部耳鼻咽喉科の尾崎朋晴博士。只今読書週間、燈火親しき夜長である。

(10月29日)

万年床車庫入りの様すべり込み

西森 花村

十月も下旬となり朝晩の冷え込みが厳しくなると、下宿生活の独り者にはそろそろ万年床が恋しくなる。わびしいながらこれほど簡便なものもなく、無精者にはうってつけだ。万年床に出入りする様子を車庫入りに例える作者は余程の楽道家に違いない。

(10月30日)

君が代をきいてるような菊の花

木村小太郎

聴覚と視覚に訴えた構成は絶妙だ。壮嚴な曲と菊、殊に白菊の氣品とは、深まる秋の大氣に似て、心身をひきしめる精神性を持つ。番傘川柳
一万句集所載の句である。

(10月31日)

にじりよる様に近づくと十二月

西森 花村

十二月は特殊な月である。社長はボーナスのやりくり算段をしなければならず、主婦は新年を迎える準備に忙殺させられる。人により立場は違っても暗い印象には変わらない。日めくりも日に日に薄くなっていく。現実には、この上五の表現うってつけであろう。

(12月1日)

その上に謡の会も十二月

生島 鳥語

世間みな狂騒のとき、謡でもなかりうと思うのは野暮天の証拠で、忙中閑を楽しむのが士というものである。試みに、いとものどかな声を師走に出して見給え、と言いたいところだが、「その上に」とあるところを見ると、いささか持て余し気味なのであろう。

(12月2日)

顔見世の東は東西は西

食満 南北

歌舞伎に堪能だった作者は芝居に関する句が多い。恒例の京都南座の顔見世は、東京と上方の役者の競演で、両者の演技の相違など比較しながら一入興味深く観られるので、師走の街の話題をあおる。作者は、この句に暫の絵を添え、好んで色紙に揮毫した。

(12月3日)

南座を舞妓焰のように出る

若柳 潮花

顔見世を観ての帰りであろうか。二人三人連れ立った舞妓の姿はまことに美しい色とりどりの焰に見えた。感覚に強く訴える作品だ。道頓堀を詠んだ「水も流れ人も流れて果太鼓 岸本水府」を思い出させる。良い句は、何かにつけて口ずさませるものである。

(12月4日)

十二月。パパと言われて油断せず

本多 柳志

この句、一般家庭を詠んだとするより、バーのママがパトロンに対してのしなと見る方が面白い。このパパ、媚と甘言をはね返せるかどうか。「事業も行き詰っていることだし、しばらくは駄目だと言っておいたじやないか」などと、一応厳しい顔をしては見たが。

(12月5日)

地方版僕の句もある日曜日

山田 季賛

新聞の地方版に掲載された川柳作品を寝床の中でゆっくり眺めている日曜日のくつろぎ、寝たばこでもふかしているような感じもして、のどかである。「妻の目に男は馬鹿な金使う」国鉄新幹線の工事に勤務していたが、数年前、五十歳で死去した。

(12月6日)

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

麻生 路郎

昭和三年は、小学生の長男を亡くした翌年に当り、悲しみの作が多い。路郎夫妻は四男五女の子宝に恵まれた。この句、家族は数珠のような、芥子の花びらのようなものだと観ずる。「子を死なし学校に子の多い」と 路郎」

(12月8日)

死ねば死ねそうに女と七日居る

前田 雀郎

次はR・Hブライス博士の英訳である。

As though we could die of we would

Living with her

Seven days

(12月9日)

割箸で名指しをされる平社員

松江 梅里

忘年会シーズンである。隠し芸が始まれば自ら進んで披露するもの、当たりそうになるとトイレへ立つ者とさまざまだ。割箸で名指しをする上役の大きな態度に宴会の雰囲気が出ている。「箸割ってくれたで出したふところ手」

(12月10日)

いざさらば膳をまたいでかくし芸

大石 文久

いざさらばと、名指しをされて意気軒昂と登場するのは、隠し芸の云わば真打ちだ。自他ともに公認ということも拍手の数で察せられる。どじょうすくいであれ、歌謡曲のメドレーであれ、レパートリーは広いのである。

(12月11日)

振り向いた首振り向いたまま落ちる

板尾 岳人

男が前方を見つめて真一文字に進む姿はよい。過去を振り向くことは男の本懐でないとする。呼び止められて抜き打ちを食らったものか。定年を迎えたサラリーマンの感懐か。具体的描写の作品ながら抽象的対象を感じさせる。

(12月12日)

百両をほどけば人をしさらせる

古川 柳

黄金の燦然とした妖気に息をのみ、ついで不足した時にかかる疑いへの用心に後退りをする。金の魔力である。昔、醜女の持参金の相場は百両と定まっていた、一割を仲人が受け取ったと言う。「百両はなくなり顔は残ってる」

(12月13日)

役人の子はにぎ／＼を能覚

古川 柳

赤子が拳を開いたり閉じたりする芸を、役人の親の収賄に通わせて諷刺した名高い句。宝暦九年の作だが、当時は折しも田沼意次・意知親子が政權をほしいままにし、賄賂横行の時代だった。

(12月15日)

銀行が夢という字を使いすぎ

山田 菊人

金が万能の世の中、庶民の夢はどうしても金に関わってくる。家一軒建てるも自動車一台買うも夢なら、子供を医者にするのもまた大きな夢で、教育ローンまでが銀行に出現した。除夜の鐘がローンローンと聞こえることだ。

(12月16日)

何気なく買ったくじなら当りそう

鵜飼 蟻朗

欲のからんだ気分を持たずに買えば何となく当たりそうな宝くじ。百円は百円でよしと割り切る者には夢はない。狂騒の十二月に抱くはかない夢の一こま、宝くじの句は意外に多い。「一攫千金の誰か夢なき宝く

じ 富岡淡舟

(12月17日)

降りる客いとんのんと続くなり

須崎 豆秋

電車が止りドアが開くと、降りる客がそれはいとも悠長に続く。プラットホームに並んでいる方は、虎視眈眈と空席を狙い、中には降りる客の間隙をすり抜けてまで乗ろうとする。人間の心理を巧みにキャッチしている。

(12月18日)

社用から遊びの癖がつきはじめ

榎南 夏六

社用族の新語も生れた昭和二十年代の後半、二十九年の大阪市民文化祭川柳大会での秀句。選者吟は「ああ社用酒池肉林のすばらしさ 水谷鮎美」だった。今や商社と言わず公社の裏出張のからくりなど目に余るものがある。

(12月19日)

大阪城汚職のビルを睨みつけ

宮園射月芳

すっきりとしゃれた高層ビルの林立する大阪の中心街、その中にはさまざまな悪が渦巻いている。汚職は今や政治家だけに留まらず、文芸・芸術の域をも侵す世相に、古武士然とした城は我慢がならぬのである。結語が鋭い。

(12月20日)

棺桶に入った様な仕舞風呂

足立 春雄

冬至の日に袖の実を刻んで風呂に入れてと、ひび・あかぎれに卓効がある。この句、それとはいささか趣が異なり、わびしい仕舞風呂で膝を抱いている人物が想像出来る。湯が少ないので箱風呂がまるで棺桶に見えるのだ。

(12月22日)

暁を抱いて闇にゐる蕾

鶴 彬

昭和十一年三月発行の「蒼空」所載の作品。昭和四十年九月十四日、金沢の卯辰山玉兔ヶ丘にこの句碑が建立された。「これは鶴君の稀らしい感傷、闘志の先端に咲いた感傷の花だ」と井上麟二が評した。革新派の心情である。

(12月23日)

美しく産みだし壁に聖母像

小浜 牧人

妊娠をすると精神の安定が大事だ。胎教をも考えてマリア様の像を掛け、朝夕お祈りをする。目覚めた時も寝る前も目に焼き付けた聖母のような美しい子を儲けたい。このマリア像、決して豪華な部屋のものではない。

(12月24日)

咳一つ聞えぬ中を天皇旗

井上剣花坊

作者の代表句と言われるこの句は大正四年の作、「大正天皇御大典の観兵式を拝観して」の前書がある。昭和九年九月十一日、鎌倉の建長寺正統院で脳溢血のために六十五歳で死去した故人のこの句碑が建長寺境内に建っている。

(12月25日)

膳に坐し杖をつくよに箸をつき

藤村 青一

句集「白黒記」所収。作者は詩壇でも活躍した詩人。高鷲亜鈍の名で詩論を川柳に導入、「詩川柳考」を著す。東京オリンピックを觀戰中に突如失明したが、今なお川柳を書き続ける。「りんどうの花きづかずに失明す」

(12月26日)

十二月わが足音があるばかり

桑原 狂雨

あと数日で年が変わる。彼方へ消えゆく一年を回顧すれば、はや莫として取留めもなく、深夜家路をたどる只今のわが足音が耳につくばかりだ。人間の生は如何にもわびしいというのである。

(12月27日)

染違い極月二十八日

西田 当百

正月用の晴着の別染が届けられた。これが注文とは大違い、当人も染屋も慌てたけれど、暮もこう押し詰ってからではどうにもならない。染違いは、実際には色の濃淡に多少の手違いが生じ、オーダーの思惑が外れる程度のものなのだ。

(12月29日)

来る年へ自愛のマスク大き目に

西出 一栄

作者は晩年病に伏せりがちだったので、歳末の感慨、来る年への願いが自愛の二字につながったのだ。本屋で新しい日記を買うのも自愛なら、大き目のマスクをつくるのも自愛のあらわれであろう。「自愛」「大き目」は優れた把握だ。

(12月30日)

鐘がひびかぬ大都市の淋しさよ

麻生 葭乃

大晦日の夜、寺寺から百八つの鐘の音が鳴り渡る。人それぞれ深い思いで聞く。この句、除夜の鐘とは限らないが、巨大化した町への批判がある。鐘が響かぬのは、騒音のせいばかりでなく、人の心がひびかなくなつたのかも知れない。

(12月31日)

初蚊帳の中は

シャツ着た

キリギリス



風邪ひいて学者いよ／＼ジジむさし

麻生 路郎

「苦沙彌先生そっくりという父となり」 // 吾輩は猫である // の先生と一脈相通じる作者だけに、丹前姿の無精髭（ひげ）はうってつけだ。伶人町の新清水清光院には運慶作の風神があり、二月一日から三日にかけて参ると風邪をひかぬと言ひ伝える。

（2月2日）

福は内落ちつく家にあらねども

青砥 可明

今しばらくの仮住まいながら、節分の日にはいっばしの豆撒きをしておにやらいをするというのである。追儺は古く中国にはじまり、わが国では天武天皇の頃から宮中の年中行事となり社寺・民間にも広く行われるようになった。

（2月3日）

鯛ちりの骨飛行機が落ちたよう

川上三太郎

底冷えのする日の馳走は鍋ものに限る。あら入れに散乱した鯛の骨を墜落した飛行機の残骸に見たてたのは直喩の句として上乘の出来だ。昭和四十一年の今日、旅客機が東京湾に墜ち百三十三人が死亡したのは航空史上最大の犠牲だった。

（2月4日）

孵卵器で生れ産卵機で果てる

川口 弘生

人間は残酷だ。文明が進めば進むほど、それはエスカレーターして行くようである。この句、鶏を取り上げ、人間の身勝手、機械文明の非情さにスポットをあてる。人間自体この様になりかねないことを思わせもするのである。

(2月5日)

あじさい寺の冬を想像せぬことだ

小出 智子

自然はすばらしい。雨季には雨季にふさわしい花が咲くのだから。紫陽花は白から青紫、赤紫へと移るのが微妙で美しい。花のマスの中で枯れ尽くした冬の庭を想像する作者の感性は凄い。鎌倉の明月院、大和の矢田寺等が紫陽花で名高い。

(2月6日)

一本の針の一生かも知れず

亀山 恭太

俺の一生は、時計の秒針のように同じ個所を絶え間なく動いていて、それで終るようである。人は、縫針や待針のようにそれぞれの役柄を果たしながら錆びてゆく。そこで針なら針らしくきらりと光りたいものだ。明八日は針供養。

(2月7日)

発明の最後は地球吹っ飛ばし

深野 吾水

第五福竜丸が水爆実験の死の灰を浴びたことから、わが国会は実験の中止を決議し、昭和三十一年の今日、米・ソ・英の三国にその旨を申し入れた。しかし、四年後の二月、私はサハラ砂漠で原爆実験に成功し四番目の原爆保有国となる。

(2月9日)

風鐸に風がある日の法隆寺

片岡つとむ

白居易の詩に「風鐸鳴四端」とある。風鐸は風鈴のことで、塔の軒先に吊られている金属製の飾りだ。早春、晩秋、あるいは風花のちらつく季に、国宝の塔の風鐸はどのような音を発するのだろうか。朝日なにわ柳壇選者の作品。

(2月10日)

建国祭寒の卵に血がまじり

橘高 薫風

寒の地卵は精がつくと言われる。黄身が盛り上がり時たま血がまじっている。それは気味の悪いものだ。かつて建国記念の日の制定に際して反対論があった。行く行く再軍備につながるというのである。再軍備は気味の悪い最たるものだ。

(2月11日)

落城の濠に浮いてる吾妻形

古川 柳

天守閣は燃え落ち、櫓なお余燼くすぶる城の濠に吾妻形が浮いて見える。女性が全くいない籠城中、武士たちが使った生理道具だ。犬筑波集の「あづまぢのたがむすめとかちぎるらんあふさか山をこゆるはりがた」から由来する名と言う。

(2月12日)

口づけの顔ともとれる水仙花

大峠 可動

水仙は厳寒の季節に咲く清楚な花。「古鏡の如く」と叙したのは俳人松本たかしである。花には黄色い副花冠があるので、人が口を開いているように見える。仲の良い口づけの顔とか、子供の合唱ととれるが、面白い見方である。

(2月13日)

恋すでに手乗り文鳥ほどの仲

安井 蜂呂

うぶな恋だ。句の暖かい感触は手乗り文鳥からのもので、チルチルとミチルの青い鳥に連想はつながる。きょう聖バレンタイン・デー、欧米では「愛の日」と呼び、伝説では小鳥たちがこの日から配偶者を求めて飛び、和合の日を送ると言う。

(2月14日)

鎮魂の松杉桜桜よし

橘高 薫風

霊を鎮めるに松や杉もふさわしいが、咲くにも散るにも誠心誠意の花は殊に良い。西行法師は文治六年二月十六日、河内の弘川寺で念願の花の季に入寂した。「西上人のみたまつつむと春ごとに花散りかかるそのはかのうへ 安田章生」

(2月16日)

子を産まぬ約束で逢う雪しきり

森中恵美子

しずかな牡丹雪から、まんじどもえの粉雪と、雪の降りようもさまざまである。子を産まぬ覚悟を秘めた女の逢瀬の、ひたすらな心象の背景は後者だ。作者はまた、「未練どころへ女は細い筆を選り」としずかな心境をも表白する。

(2月17日)

かの子には一平がいたながい雨

時実 新子

川柳界の与謝野晶子との評価を得た作者だが、本人は晶子以上に岡本かの子に深く心を通わせているようで、かの子のよき理解者としての夫君一平の存在を、一種の羨望の目で見詰めている。下五は作者の鬱の象徴。今日、かの子の忌。

(2月18日)

正義なら何故マスクする中核派

塩満 敏

若者が学生運動に身を挺し、情熱を傾けるのも頷けることだが、何故マスクで顔を隠すのか。信ずるならば正正堂堂とあれというのだ。これによく似た句に「鉄兜おやじは覆面せなんだぞ 西森花村」がある。鉄兜とヘルメットの違いか。

(2月19日)

五体投地罪がとび散る音なのか

片岡つとむ

奈良東大寺二月堂修二会は、今日の試別火(ころべっか)から三月十四日まで練行が続けられる。五体投地は両膝・両肘・頭を地につけて拜する最高の礼法。火の粉を浴びながら韃鞣の妙法という荒行で罪過を懺悔する。

(2月20日)

雨の夜を按摩殺されそうに去に

松本 波郎

芝居が核心に向かう前の、雰囲気を出すための舞台設定、所謂序幕の一場面のような作品で、平凡な叙法にもかかわらず凄惨な程の陰惨さを感じさせる。最近やたらに終止形で止める作品が増えたが、この句「去ぬ」では問題にならない。

(2月21日)

日本の童話かたきを討ちたがり

延原句沙弥

私達の時代は童話と言えば「桃太郎」「猿蟹合戦」「カチカチ山」の類
이었다。私の子どもには「三匹の子豚」や「赤ずきんちゃん」を読ん
で聞かせた。懲悪の話も両者のニュアンスは少し異なる。神戸の人、ユ
ーモアの句を得意とした。

(2月23日)

父ちゃんが吐られたのをふれ歩き

木村 水洞

作者は麻生路郎門で活躍したが、師の死後は影をひそめてしまった。
この句も養子らしい身辺をユーモアで味付けしている。「御用聞き養子
と知らぬ世辞を云い」「聞込みと違う養子の酒の量」もそうだ。水洞は
水堂を改めた後の雅号。

(2月24日)

飛梅やしんじつ恋はおわりたり

宇佐美和子

別離の詩。昔、菅公が紅梅殿で「東風吹かば」の一首を詠み、梅に別
れを惜しんだところ、梅は配所の庭にまで飛んで、花を咲かせたという。
福岡地方では、太宰府天満宮へ夫婦や恋人が揃うて参詣すると、別れの
憂き目を見ると言い伝える。

(2月25日)

懐炉まで入れて重役のみに行き

竹内 圭三

これは相当にお年を召した重役さんだ。根っからの酒好きであろう。あるいは、酒は二の次で女の顔を見にいらっしやるのかも知れない。「スランプだスランプだとして飲み歩き」の句も同じ、軽い形容でひょうきんな味を出している。

(2月26日)

水栓のもるる枯野を故郷とす

河野 春三

昭和二十三、四年ごろの作品。見渡す限り焦土と化した戦災の地から出直しの人生が始まる。水道栓からポタポタ水の洩れていたのが印象鮮烈で、この句の場合、枯野は冬とは限らぬのだ。去る二月十五日発行の定本河野春三川柳集に所載。

(2月27日)

売られたは三味線に手のとどく頃

岸本 水府

水府は閏年の二月に生れたので誕生日は四年に一度しか廻って来なかつた。大正二年二十一歳で番傘の創刊に加わる。これは大正六年の作。水府邸の玄関には分厚い大福帳が置いてあり、来訪者はそれに署名と佳句名言を書き連ねた。

(2月28日)

四月馬鹿チャツカリ夫人ひっかかり

寺井のり子

エープリルフル。四月一日に罪のない嘘で人をかつぐこと。日頃抜
け目のない夫人がまんまとひっかかったのだ。俳句の「四月馬鹿母より
愚かなるはなし 岡本圭岳」は「母おやほもったいないがだましよい
古川柳」を思わせる。

(4月1日)

図書館のスマミで前途を語り合い

後藤 梅志

前途洋洋たる志を抱く若者が語り合うのは図書館の一隅、苦学力行の
士の堅実な夢であろう。故人もそのようなタイプの人柄だった。今日、
図書館記念日。明治五年の今日、湯島に東京書籍館なるヨーロッパの
近代的な図書館が設置された。

(4月2日)

花曇り二度目に会へば酔うてる

橋本 緑雨

今年は桜前線の到来が早く、今や大阪の染井吉野は満開。花に酒は昔
から付き物で、この句、中七がポイントだ。作者は「川柳雑誌」創立期
に麻生路郎を助けて編集に力を尽くした。酒の句多く「酒ついであなた
はしかしどなたです」

(4月3日)

表面は茶の会にして両巨頭

中島生々庵

どの世界にもボスがいて牛耳る。また、茶会にかこつけて謀議談合をなすのは戦国武将の昔からのことだ。氏は麻生路郎の死後、同志をまとめて「川柳塔」二百号（通算六百六十号）の礎を築いた。今日、阪急グランドビルで記念大会を開く。

（4月4日）

凡人の幸せ明日をうたがわず

木幡 村雲

故人が番傘わかくさ川柳会会長をしていた昭和四十四年四月六日、この句の句碑が野崎観音の裏山に建った。近くに「観音のいらか見やりつ花の雲 芭蕉」の碑。大東市を眼下に大阪平野を一望に見渡しながらスモッグで六甲山は見えない。

（4月6日）

満開の花に誘われ修羅出土

香川 酔々

昭和五十三年四月初旬、古市古墳群の仲津媛陵古墳陪塚から、ほぼ原形の大小二つの修羅が発掘された。この句は誠によく桜の精神性を昇華させていて、古い修羅の持つ魂が、妖婉な花に誘われて出土したとする。

（4月7日）

路郎賞受賞作品。

花祭り釈迦は六時を指し給う

上田 芝有

釈尊が生れた時、一手は天を指し、一手は地を示し、即行七歩、四方を顧みて天上天下唯我独尊と言われた。その手が時計の六時の形だというのである。芝有・豆秋・句沙彌のユーモア川柳人三人が、揃って癌で亡くなったのも因縁か。

(4月8日)

老いて尙桜かなしや花盛り

宮尾あいき

植物の持つ生命力の強さに圧倒されることがしばしばある。幹の根元はすでに空洞化してしまっている老木が、艶冶な花をいっぱいにつけるのである。女には花と一脈相通じる感情があるようだが、老境にある作者はそれをあわれと見る。

(4月9日)

孤独地藏花ちりぬるを手にうけず

川上三太郎

孤独地藏連作七句の筆頭の句。作者自身の境涯、心情を表白している。「孤独地藏お玉じゃくしが梵字書く」などの作品が続く。さくらの散る情景にも「ペンキ塗立桜とんじゃくなしに散る 清水白柳」とはおのずから異なるが共に佳作。

(4月10日)

皆咲けば百花繚乱妻の庭

相元 紋太

神戸の川柳界の中心的人物だった作者は、昭和四十五年四月十一日死去した。これは、手狭なわが家の庭も、妻の丹精のおかげで形が整って来たという、常住坐臥の句である。「詫状に殿か様かを考える」紋太調と言われる句風を確立した。

(4月11日)

妻の留守合せ鏡をして見たり

水谷 鮎美

物憂い春の午後の所在なさに、妻のしている通りに真似て合せ鏡をしてみたのである。男の稚戯が春愁に同化して、作者独特の鋭い感覚的把握を示している。「本を閉づほんと云ふ音春めきぬ」も同断。氏は晩年、師路郎の元を去った。

(4月13日)

大阪に花の里あり通り抜け

本田 溪花坊

造幣局の通称「通り抜け」の桜は、八重咲きが多いので例年四月中旬に公開される。百年目を迎える今年は今日から向う一週間で、新種の「黒田百年」を初め九十三品種、四百四十七本が妍を競う。同庁舎の玄関脇にこの句の句碑がある。

(4月14日)

気晴らしに来て泣かされる新喜劇

中島 小石

心慰まぬ日が続いたので気晴らしに中座を覗く。大いに笑いもしたが、人情味豊かな舞台にほろりとさせられる。芝居と分かっているながら、納得ずくで泣かされるのが新喜劇で、五郎、十吾、天外、寛美と、時代を追ってのファンでいる。

(4月15日)

割勘のもつれへレジの無表情

高橋千万子

一般に女性の作品には抒情的なものが多いが、この作者は男性にひけをとらず批判の眼が鋭い。川柳人に最も必要な、自他双方への客観姿勢を保ち、明快な句を生んで、しばしば快哉を叫ばせる。「封筒の色に似合わぬきつい文」

(4月16日)

母一人子ひとり母の好きなもの

片岡つとむ

母一人子ひとりの境涯には特別な情愛の絆がある。生き別れ、または死別した父の代わりに、男親ともならなければならぬ激しさを強いられる母だ。子もまた母の好みに合わせる心ばえのやさしさを持つ。作者の師水府の句風が彷彿とする。

(4月17日)

れんげ菜の花この世の旅もあと少し

時実 新子

人生は一つの旅。都会住まいの作者が、一面のれんげ・菜の花を旅程の中に見て幼時を思う。年年歳歳、花は同じだが、我は幼少の我に非ず。残る旅路もそう長くはなさそうである。また、秋の感懐に「薄かるかや死んでゆくのは誰が先」

(4月18日)

春雨へ女房と濡れるあほらしさ

川村 好郎

今日は穀雨、春の季節の最後で、春雨が降って百穀を潤すという日である。この句は、月形半平太の台詞、「春雨じゃ、濡れて行こう」を踏んでいるのは言わずもがな、舞妓雛菊ならぬ古女房では、春雨の情趣も興醒めだと言うのである。

(4月20日)

演習が来ては堇を踏むでゆき

竹久 夢二

夢二は夢二らしい抒情句の外に、多く反戦の作品を残した。夢二の絵が初めて世に出たのは、平民社の機関紙「直言」に掲載のコマ絵からで、反戦思想を主としたものだった。日露戦争後の、戦勝国民の中にあつて批判の目を光らせた。

(4月21日)

恋人の膝は檸檬のまるさかな

橘高 薫風

句集「檸檬(れもん)」所収。そのあとがきに私は次のように書いた。檸檬はその形、知的、また抒情的で清潔感にあふれている。天地の純真が身体一杯に漲っている感じである。私は、私の句を檸檬のように清新ならしめたいと願う。

(4月22日)

羊羹をいただいとると地震かな

須崎 豆秋

この終助詞「かな」の巧さは豆秋の独壇場とも言える。単なる詠嘆だけではなく、ユーモアの助詞と名付けたいくらいだ。羊羹以下の用語も実に適切で、落ち着いた雰囲気の場合から一転して、慌てふためく場面が想像出来ると言うもの。

(4月23日)

しがみつくほどのこの世でなかりけり

麻生 路郎

昭和四十年の今ごろ、路郎最晩年の作で、七月には喜寿金婚の佳き日を迎える筈だった。この句、文語体でなければ表現不可能な感慨だ。川柳は、十七音字を基調とすることと、人間を詠むこと以外何らの制約も無いと、今の私には思える。

(4月24日)

首相また新装開店するつもり

佐野 白水

政治は金の力に左右されがちで、派閥の均衡が破れると、当座は内閣改造で表面を取り繕う。新装開店とはうまく言ったものだ。吉田内閣に至っては第五次内閣まで成立させたので、「吉田さん三振しても引っぱらず 須崎豆秋」

(4月25日)

泣いていてふっと手摺りのおもしろさ

食満 南北

「男泣き手よりもていてふく涙女は顔をもていてぞふく」これは、文楽に古くから伝わる人形遣いの口伝書にある和歌の一つだ。句は、文楽の舞台につまされて泣いていながらも、ふと人形の手振りの品の良さ面白さに酔うとの意。

(4月27日)

酒の味鯛茶の味の春思う

太田 茶人

七十七夜の前後、瀬戸内海の魚が産卵のため浅瀬に集まるのが魚島時で、鯛も一番美味な季とされる。晩春の宵、酒盃を重ねたあとの淡白な鯛茶の味は、上方の粋そのものと言える。「法善寺わかる男と酒を酌み」正に一刻千金であろう。

(4月28日)

逢う場所は少しキザだが紀伊国屋

谷垣 史好

丸善や駿々堂に馴染んだ世代は、旭屋とか紀伊国屋というどでかい書店の出現に度胆を抜かれた。おちおち書物の吟味もしておれぬ混雑ぶりである。それでも待ち合わせには便利で、ターミナルビジョンなるものも出来て退屈をさせない。

(4月29日)

張り替えた障子の中に母います

西尾 栞

平凡な暮らしの中で家族を詠むことは難しいことだが、心底、人の心を打つのは骨肉の情愛であると言える。「最後の最後の味方は妻なりき」「意見する儂がまだまだ遊びたし」と、作者は、母へも妻へも、そして母へも愛情の目を注ぐ。

(4月30日)

見渡すとユダのこころをみんな持ち

麻生 路郎

キリストとの最後の晩餐には、十二使徒の一人として陪食したユダが、銀二十枚でキリストを売ることになる。悪魔に魅入られる人間の弱さに触れた句で、これを小市民的に表現したら「飲まされて味方を売って帰って来 市場没食子」

(6月1日)

日記書き終えると昨日の事になる

神前 阿字

今日の出来事を日記に認めた時点で、その日は即座に過去になってしまふ。そう言えば記録とは厳然とした顔を持ち、日記は一種の過去帳だと思えてくる。夫君も川柳に相親しみ、「病妻の持つ掃除機を奪いとる 朋義」と情愛豊かだ。

(6月2日)

三尺の机広大無辺なり

村田 周魚

大正九年四月の創立以来、川柳きやり吟社を主宰した鯛坊は、昭和二年、周魚と改名した。創刊以来、雑誌の巻頭言「明窓独語」を五百四十八回に亘り執筆した机は、正に広大無辺だと言える。そして明窓は瞑想に通ずると自ら述べている。

(6月3日)

河童同志愛の言葉は泡になり

伊藤 愚陀

昭和三年の作品。当時、川柳雑誌の編集部には愚陀・乱耽という二人の学生がいた。二人は仕事を与えられると、それをすぐ他の人達に譲り、籐椅子にもたれたばこをふかしていたので重役という仇名がついた。愚陀は昭和七年末夭逝した。

(6月4日)

モーターよ労資何れに味方する

住田 乱耽

愚陀没後の編集室には重役が発散していた余裕が皆無となった。愚陀とは幼稚園からの親友だった乱耽(らんたん)は、翌年の昭和八年、二人の句集「潮騒」を編んだ。乱耽の俠気は、後年「乱耽と号し十七字のやくざ 堀口塊人」と称揚される。

(6月5日)

旅びとは山を見つける戎橋

木下 愛日

一人のエトランゼが戎橋に立つ。人の流れと川の流れが交錯し、ビルで空も狭く限られた所だ。方角は分からぬままに、ふと山を見付けた。初夏の色をしている。大阪人も見逃しそうな生駒山系の山が、太左衛門橋の上に確かに横たわる。

(6月6日)

防音壁ばかりで囲む田植村

藤本七曜子

国鉄新幹線や高速自動車道路には、騒音を防ぐ防音壁が随所に設けてある。それらが並走する地はまるで防音壁の砦で、田植えもその中で行われる。コンバイン農業には或いはふさわしかろうが、水田を渡る風の情趣とてない。

(6月8日)

もてたこと妻へ話して笑われた

西 いわを

男はいつまでも純情だ。少し酒が入ると「口振りは今にも落ちる仲居さん 土井文蝶」という風な商売上の媚にも鼻の下を長くする。長年連れ添った妻には、主人の持てる持てないぐらいはお見通しで、話を仕舞まで聞いてもくれない。

(6月9日)

一ヶ所は和漢へ響く時の鐘

古川 柳

江戸で時の鐘を撞いたのは、浅草・上野・芝などの寺をはじめ八ヶ所だったが、明暦の大火以前は石町の鐘楼一つであった。石町には、長崎屋という和蘭陀人や中国人が来朝した際に泊る宿があったので、和漢へ響くとの趣向が生まれた。

(6月10日)

雨だれは肺の中までぬらすなり

木下 幽王

入梅。肺結核の療養者にとって梅雨期ほどつらい時候はない。高い湿度に肺が押しつぶされるかと思えるほどで、低い雨雲もまた精神的に病者を圧迫する。「血を吐いているのにラジオは打ちましたく〜」笑えぬ笑いのかくも辛辣な。

(6月11日)

雨ぞ降る渋谷新宿孤独あり

川上三太郎

六大家と言われた巨星たちは麻生路郎・村田周魚・梶元紋太・川上三太郎・岸本水府・前田雀郎で、明治二十一年生まれの路郎から水府までの五人は、それぞれ一つの違いであった。昭和四十五年四月の紋太の死で六大家の時代は終わった。

(6月12日)

浮き草は浮き草なりに花が咲き

中島生々庵

根無草の異名を持つ萍(うきくさ)は、夏期、緑白色の小花をつけるものもあるが、実際には殆んど咲くことがなく、葉状の茎が分裂して繁殖する。作者は、浮き草の可憐な花に下積みの人生を見る。この句の碑が今日、岡山の川柳の町弓削に建つ。

(6月13日)

あじさいの着道楽にも似ておかし

西出 一栄

五月雨の降り続く前栽や、家並みに添った川の流れに優雅なかげを置く紫陽花は、六月の花だと言え。七変化とか刺繡花の別名の通りのお洒落なところ着道楽とするにふさわしい。花に見えるのが萼で萼の中心の小さい粒が花なのである。

(6月15日)

一匹狼の薬瓶とはさびしいな

羽原 静歩

政界の一匹狼と言う語があるように、どの世界にも、独自の見識から独力で行動する男がいる。常に闘争的で、その孤影さえむしろ凜凜しく見えるものだ。しかし寄る年波、薬餌の世話になる姿からは往時の片鱗も伺うことは出来ない。

(6月16日)

大物の器でないとは酌いで知り

野呂 右近

作者は長年菓子匠として生計を立てて来た。この句は、ある宴席での実感から生まれたものであろう。人間は酒が入ると生地が出やすい。酒杯のやりとりから、相手が噂ほどの人物ではないと見て取った。下五の表現に精彩がある。

(6月17日)

悪役に徹し得難い顔になる

高田 博泉

京都の太秦にある映画村では、撮影のあるなしにかかわらず芝居の扮装をした俳優と一緒に写真に入ってくれる。「いつもテレビの悪役で出ている人や」と子どもの私語が聞こえたりもする。主役も悪役も得難い顔になるには年季が要る。

(6月18日)

遠く来て信濃に山のない日なり

麻生 路郎

「雨の松本にて」の前書あり。上五に沸沸たる旅情を込め、以下で、山の見える日にも増して深い旅愁を感じさせる手法は見事で、旅行吟の圧巻だ。晩年青森に遊び「十和田湖よみな酒になれ旅人へ」の句を成したが、これも大きな旅情。

(6月19日)

かみなりおやじ独りにされて飲んでいる

傍島 静馬

何かにつけて怒鳴らねば気のすまぬ癖の親父は、今の世には流行らず、疎外感にさいなまれながら、独酌を余儀なくさせられている。それでも「デパートのピラに父の日思い出す」と感謝される日もあるのだ。ユーモア作家らしい作品。

(6月20日)

立ち話素足も築地明石町

近江 砂人

竈木清方の名作「築地明石町」は、情緒的な自然と美人画との融合だと言われる。遠景に漁船、近景には朝顔を配して一人の芸者が立つ。黒い塗りの畳表の下駄の素足がまぶしい。それは立ち話をしていていまして、別れた風情とも見える。

(6月22日)

おしっこが溜りたまつた犬の声

有信新之助

鎖つきの動物は哀しい。主人の気まぐれで散歩が遅れると、おしっこが辛抱しきれぬほどに溜り、遂には悲鳴となって訴える。作者の家には「このごろ歯がボロボロ抜けるので入れ歯をしてやらなあきまへん」と言うほどの老犬がいる。

(6月23日)

稽古屋の猫は扇子でたたかれる

若柳 潮花

踊りのお師匠はんの愛猫である。座布団の上で無精をきめこんでいたら、お稽古人に追われる羽目となる。舞扇でやられることもある。軽い調子の穿ちが利いて、踊りとは限らぬものの、稽古場の華やいだ雰囲気がかがえて面白い。

(6月24日)

動物園みな就職をしてるなり

福田山雨楼

囚われの身ではあるが、毎日労することなく食にありつける結構な境遇の動物たちは、皆就職をしていて、失職の自分より数等幸運であると言うのだ。川柳雑誌社副主幹を務めた理論派。「ぼうふらは皆蚊になれり失業苦 有働芳仙」

(6月25日)

企むや身のすみずみに螢棲む

時実 新子

和泉式部の和歌に「物思へば沢の螢も我身よりあくがれ出づる玉かとぞみる」があり、魂魄ただよわす恋情を見事に描写する。この句は、逆に螢を身のうちにぎっしりと棲まわせて、企みの呼吸さながらに明滅させている。現代的だ。

(6月26日)

盛り場をむかしに戻すはしひとつ

食満 南北

昭和二十三年六月、道頓堀川に太左衛門橋が復した時、往事を懐かしみ、南地の復興を願って詠まれた。作者が朝に夕に、芝居と松竹と自宅を往き来した馴染みの橋である。昭和三十六年七月十四日、この句碑が橋の北詰めに建てられた。

(6月27日)

初蚊帳の中はシャツ着たキリギリス

麻生 葭乃

季語が入っていても俳句とは画然とした味を備える。洗いたての縮みのシャツ・ステテコを着た夫君路郎が、寝そべって読書でもしている様子だ。瘦身長脛の人物をこれ位洒脱に描写出来るのも、その人柄のしからしめるところと言える。

(6月29日)

電柱は都へつづくなつかしさ

岸本 水府

山から山へ鉄塔が続き、野から野へ電柱が続く。孤影をかこつ一人物の都会を思い、友をなつかしむ心情が爽やかだ。映画の終わりのシーンを感じさせるこの句は、大正十五年、水府三十四歳の作で、青春性がなお色濃く漂うている。

(6月30日)

蚤にも喰わせず天下もとらず

西尾青一路

立派なこともしないが、害にもならない平凡凡凡のことのたとえの「沈香も焚かず屁もひらず」とほぼ同義であろう。一見、箱入りの青白い若者の気概のなさに触れた句に見えるが、裏には昭和初期の鬱勃たる憂国の気運がうかがえる。

(8月1日)

水芸の水は乱れず拍手鳴る

大高 角嵐

水芸は、多くの女芸人が演じた夏向きの涼しい曲芸で、滝の糸に擬して、扇や刀剣の先、衣服の随所から水を吹き出させて喝采を博した。水芸、水、乱れず、とりズム構成もよく、華やかで端正な舞台と、観客席のどよめきを伝える。

(8月3日)

夏期講座みな居眠りに来てるよう

市場没食子

林間緑陰の講座は、涼風と蟬時雨の中、至ってのんびりと進行する。熱帯夜のため熟睡出来なかったこともあって、聴講生の多くは項垂れたまま。公務員・会社員の研修や、受験生のための補習授業などにある緊張感はかけられない。

(8月4日)

がらあきの電車に座る好きな場所

梶原 溪々

人間とはおかしなもので、自身に馴染みの位置を到るところにしつらえる。この句は電車に乗った場合で、気に入った席を占められれば、多少なりとも乗り心地が良いわけである。映画館にも居酒屋にも「わが指定席」があるものだ。

(8月5日)

ひとかけの骨も納めず原爆碑

杉 久美枝

原爆での死者は、骨一つ髪の毛一本すら遺されていない。その悲しみに触れる。「両手は黒いべっとりしたものが付着していた。自分の皮膚が焼けて黒くたれ下がっていたのだ。それと気づかずに洗い流そうとして……」と体験記に記す。

(8月6日)

砂煙の中からホームインの顔

岡井やすお

夏の華と讃えられる高校球児の熱闘は、真夏の太陽と甲子園の土が演出する汗と土埃の交響楽だろう。日ましに汚れを増すユニホームがそれを象徴し、敗者が去る時に持ち帰る土は青春の証となる。大阪代表の春日丘高校の健闘を祈る。

(8月7日)

秋の水人それぞれに昔あり

岩田 美代

今日は立秋。「秋きぬとめにはさやかにみえねども」風の音や水の色に際立った秋の気配を感じるのが、われら日本人である。古人は水の色に秋の初めと限りを見極めた。心づくしの秋、川柳人のしみじみとした感傷が見事である。

(8月8日)

銀行のカメラに向かってハイチーズ

田形 美緒

銀行強盗などの不意打ちの予防に、金融機関では店にカメラの放列を敷く。それは大袈裟に言えば、樹上からうかがう蛇の目に似ている。一般の顧客の抱く嫌悪感を、作者はユーモアで応酬する。痛烈なひらき直り、批判精神の持ち主だ。

(8月10日)

よく泳ぐ妻は他人のよう見え

山本 一途

かつてわが国は、水泳日本の名をほしいままにしていた。一九三六年の今日、前畑秀子嬢はベルリン・オリンピックの女子二百米平泳で優勝、「前畑ガンバレ」の報道員の声は、いまなお私どもの耳にある。

(8月11日)

籠の鳥空の高さがこわくなり

青木 三碧

餌と水をあてがわれ、見た目にも平穏なつがいの小鳥が、いったん空に放たれたとき、底知れぬ恐れを感じるに違いない。青い青い無限の空だからである。有限と無限の世界の差異、安逸への慣れ、それは鳥に仮託した人間の心であろう。

(8月12日)

しきたりも私までよとお燈明

中西 明子

大阪ではお盆の初日である十三日に苧殻を焚いて精霊を迎え、十五日に送り火を焚く。そうした仏事も私の時代までで、子供たちには期待は出来ない気がする。亡き父母への繰り言なのだ。「諸行無常亡母が次第に若くなる 中村優」

(8月13日)

墓やや傾きてありぬ涙流るる

清水 白柳

苔むした墓がある。少し傾いているので一層胸を打つ。まことに心の深層をゆさぶるような述懐を、適切な調べで高めている。来る九月二十六日、阿部野神社境内に作者の句碑「菊活けてひととき欲を忘れたり 白柳」が建立される。

(8月14日)

犍猛な兵士はいらぬ自衛隊

谷垣 史好

終戦記念日。終戦と敗戦、進出と侵略、文字は替えても事実に相違の
あろうはずはない。軍事費の突出に世論の高まる昨今、作者は、自衛隊
は犍猛でなくて良いと断言する。土砂崩れや豪雪の災害復旧に出動する
兵士、それでいいと言う。

(8月15日)

大仏の鐘杉をぬけ杉をぬけ

浅井 五葉

「奈良二郎つかい果した人も聴き」と麻生路郎も詠んでいるが、東大
寺の鐘の音の莊嚴を五葉の句ほど巧みに伝えるものはない。二月堂下の
良弁杉をはじめとする杉林を配して、いやが上にも格調を高める。氏は
番傘川柳社創立同人。

(8月17日)

神経を抜けば地獄のおもしろさ

戸田 古方

地獄絵を見ると、三途の川で奪衣婆(だつえば)が亡者の衣を奪い取る。
罪人は針の山や血の池へ追われ、鬼に責めさいなまれる有様はまことに
すさまじい。そこには極楽浄土での安楽な世界の退屈はない。ただし神
経を抜いての話だ。

(8月18日)

竹槍におむつを干してよい天気

西垣 錦風

昭和二十年八月、敗戦に打ちひしがれた国民には、殊更に暑い夏であったが、直ちに立ち上がらねばならなかった。そこにはいのち生き延びた爽やかな解放感もあった。竹槍は物干竿に、鉄兜は鍋に、爆弾の穴は格好の塵捨て場になった。

(8月19日)

メガホンの同じ穴から民主主義

武部 香林

戦時中には防空演習なるものに明け暮れて、戦意の高揚が叫ばれた。敗戦を境にして、今度はアメリカ追従の民主主義一辺倒の世に変わった。米よこせ運動も労働者ストも、ひっくるめて民主主義であった。メガホンの戸惑いが分かる。

(8月20日)

こんな時えらい坊主も出んかいな

須崎 豆秋

国乱れて忠臣あらわれ、家貧しくて孝子出づと言うが、敗戦により精神的・経済的主柱を失った国民は強力な救いを求めた。作者は、例えば日蓮のようなすぐれた宗教家、思想家の出現を願う。「ちちははにめぐりあいたや靴みがく」

(8月21日)

遺髪が戻り遺骨が戻り本人が戻る

麻生 路郎

戦後は一口に言って混乱の時代であった。「何が何だかさっぱり分からない」ことがしばしば出来た。この句のようなでたらめが実際にあって、世人を驚かせた。兄戦死の報により兄嫁と結婚した弟の前に、帰還して来た兄もいた。

(8月22日)

通せんぼ少年すでに恋ごころ

安井 蜂呂

少年に幼い恋心が芽生えると、好ましく思う少女には、かえって意地悪い仕打ちに出る。お地蔵さんの縁日などで、いじめたりいじめられたりした思い出を、だれしも持っているに違いない。久子夫人とは、おしどり川柳家である。

(8月24日)

リキユールの中のふらんす小咄よ

森中恵美子

「せんりゅう・ふらんす」の中の一句、これは本場パリでの作。片仮名、平仮名、漢字の変化に工夫が見える。フランスの文化を敬愛していたドイツ軍司令官コレティツは、パリを焼かず、一九四四年の今日、降伏文書に調印した。

(8月25日)

輝くや元より金に嫁せし身の

井上劍花坊

この句に接するとき、柳原白蓮女史を思わずにはおれない。伯爵家に生まれ、伊藤伝右衛門へ嫁ぎ、筑紫御殿の主として栄華を極めた頃の美しさを想像する。虚栄と政略の結婚への激しい批判が脈打っていることも明白で力強い。

(8月26日)

一人去り二人去り仏と二人

井上 信子

「剣花坊逝く」の前書がある。夫の死後、有縁の人たちもつきつきと立ち去って、最後は仏と二人きりになってしまった。これが夫婦の姿なのだと思う。簡潔な表現故に悲しみが深い。作者はこの二十五年後、九十歳の天寿を全うした。

(8月27日)

姑の屁をひったので気がほどけ

古川 柳

人間諷詠の川柳には、屁は親しみをもって迎えられる。あこぎな姑をも、かくはユーモアの衣で包み込む。「身二つになっておならをよくおとし 高橋かほる」は昭和初期、「妻の屁をあわあわと聞くあかつきよ 寺尾俊平」は現代の作品。

(8月28日)

君などは悪貨の一人流行るべし

長谷川一徹

十六世紀、エリザベス女王に仕えた財務家グレシヤムは、「悪貨は良貨を駆逐す」と言った。この句、人格はゼロで技術も低い、言わば悪貨の類いの君だが、遊泳術にたけているから大いに繁盛するだろうと言うもので、作者は医学博士。

(8月29日)

かぶと虫死んだ軽さになっている

大山 竹二

竹二には子どもはなかったが、近所の子どもと祇園神社の夜店へ行き、甲虫を一匹買って来た。木の端切れと有り合わせの網で虫籠を造り、砂糖水をなめさせて飼う。随分長く生きていたが、ある朝、突然死んでいた。その時この句が出来た。

(8月31日)

七草をバイクにつけて淀の秋

羽原 静歩

今日仲秋の名月。昨今、淀川堤で秋の七草を揃えることは出来ないが、月へ供える芒を採りにバイクを走らせる作者の姿が見える。馬の尾の様に風になびく芒の束は、都会に残る野趣と言えよう。「月浴びて詩吟朗々堤を行く 菊地繁男」

(10月1日)

赤い羽根つけて脱線せぬデート

平松 圭林

善意の赤い羽根を胸につけて逢う二人は、その日けじめをわきまえる。スイスの牧師が道端に、「与えよ、取れよ」と書いた木箱を置き、富者は金を入れ貧者は引き出したのが、共同募金の起源だと言う。わが国では昭和二十三年から。

(10月2日)

長靴の中で一びき蚊が暮し

須崎 豆秋

下駄箱から長靴を取り出したら、蚊が一匹力なく出て来た。人肌の温もりで命永らえていた秋の蚊であろう。夏目漱石の俳句に「叩かれて昼の蚊を吐く木魚かな」がある。両者微笑を誘うことに変わりはないが、これは長屋の詩だ。

(10月3日)

眼を入れたダルマにやっど静もどる

宮西 弥生

達磨大師は禅宗の始祖。南インドから中国に渡り、少林寺で面壁九年坐禅の修行を積む。その姿になぞらえた張子のだるまには、願い事がかなった時に目を入れる習わしがある。「達磨眼を貰い神通力消える 小島蘭幸」今日達磨忌。

(10月5日)

末法の世の新聞をたたみけり

安藤寿美子

「新聞の絞れば血潮にじみそう 本多柳志」という句もある。新聞紙上には、戦争での大量の殺戮(さつりく)をはじめ、交通事故や殺人事件の血なまぐさい記事が跡を絶たない。誠に末世の感深しと、溜息とともにたたまれることである。

(10月6日)

盲いたる人花愛でて花散らす

野呂 右近

秋の草木の花は、木犀や萩のように、こぼれるという風情のものが多
いようだ。この句の場合は、例えば鉢植えの菊の大輪の花を想像する。
盲人ゆえに手で軽く触れても見たのであろう。花卉の数片がほろほろと
こぼれた。哀感に富む。

(10月7日)

赤とんぼ俊徳丸の塚を翔ぶ

香川 酔々

謡曲「弱法師」や浄瑠璃「合邦ヶ辻」の俊徳丸の塚が、近鉄信貴線服部川駅の近くにある。実は横穴式古墳なのだが、世に俊徳丸鏡塚と伝え、入り口に実川延若丈寄進の焼香台を置く。赤とんぼや露草の花は、秋の格好の点景となる。

(10月8日)

郵便はまだか箒目美しい

藪内千代子

作者は七十才を過ぎた年配とお見受けするが、今なお美しい根っからの浪花女性である。この句、その人柄や瀟洒(しょうしゃ)な住居のたずまいまでが偲(しの)ばれようというもの。今日、万国郵便連合記念日。番傘川柳一万句集に所収。

(10月9日)

マスゲーム時代はあなた達のもの

芝原 路春

マスゲームは運動会の華の一つである。幼稚園児の遊戯に類したもので、高校生のマスゲームに至るまで、若人の潑刺(はつらつ)とした演技に、次代を背負う世代の頼もしさを感じ得る。中七下五の表現に大きな期待がこもる。

(10月10日)

作家の妻いつも背中へ話しかけ

不二田一三夫

立派な書齋を持つ作家ではなく、雑文で糊口をしのいでいる者の、またその妻の姿をズバリ描写している。作者は昭和三十年五月麻生路郎門に入り、編集を手伝い、路郎死後は川柳塔の編集に専念した。昭和五十五年十月十一日死去。

(10月12日)

うつくしき刺青を見るきりぎりす

大山 竹二

小村雪岱筆の浮世絵、「お傳・雪の肌」の官能的な図柄を思わせる作品だが、また、これは男の逞ましい背中の、倶梨伽羅紋紋の見事さとも見る。虫籠の下で双肌脱ぎになった男一匹。「素っぱだかわが亭主にしてみたし 麻生路郎」

(10月13日)

鈴虫は身受身売はきりぎりす

木村半文銭

虫の音を聞き分けて、身受けに喜ぶ鈴虫の、鈴に似た涼しげな鳴き声と、身売りに直面してのきりぎりすの哀切限りない声とに、女の悲喜を譬えたもので、古川柳の手法の残影がある。大正・昭和の大阪川柳界に指導的役割を果たした一人。

(10月14日)

自分すら救えぬ人の立候補

麻生 路郎

政治の世界は一寸先が闇である。ひょっとして人間性を喪失した者でないと適格者とは言えないのではなからうか、と思えるふしが多い。自分すら救えぬ人が、人を救う政治家になれるなどナンセンスで、利権があるからに過ぎない様だ。

(10月15日)

勲章をくれる悪いことしないのに

榎谷 寿馬

將軍の功名は多数の兵卒の犠牲の上に輝く。また、戦争の武器や公害の元となる真理の発明者にも、荣誉ある勲章が授けられる。自分も小さいながら勲章をもらった。あの人達のような悪いことはしていないのに。庶民の皮肉の痛快さよ。

(10月16日)

貯金箱またひき潮となりはじめ

麻生 葭乃

お金と言うものはそう簡単には貯まるものではない。少し貯まったと思っても、油断をするとすぐに無くなってしまふ。引き潮となりはじめるといふ表現が何ともうまく、実感をともなうなずかせられる。今日、貯蓄の日。

(10月17日)

今日からはお前といふぞ俺といふ

石崎 洗塵

これは新婚第一歩を踏み出しての関白宣言である。このような花婿は、今日の大安吉日、結婚式を挙げた多くのカップルの中には見られぬだろう。すべてが「私達と複数で云う愛しよう 麻生路郎」なのだ。作者は石崎千仞元阪大医学部講師 朝日橋病院長。

(10月19日)

二三日新聞も見ず遇うていた

川上 日車

新聞ほど市民生活に直結したものはなく、休刊日など、一日のリズムが崩れるような気さえするものだが、この句の場合は別だ。今様では、ヒット曲の歌詞にある通り、「ふたりでドアしめてふたりで名前消して」となる訳である。

(10月20日)

煩惱は裂けし柘榴に極まれり

吉岡 美房

柘榴がパツクリ口を開けているのを、この姿こそ煩惱の極だと見たのである。体内のドロドロとした煩惱が裂けて、真っ赤な腸を見せている。果物へもこういう見方が出来るのが川柳だ。「この艶で腹まで腐っている」

(10月21日)

漢薬の匂いおならに出て寂し

若本多久志

煎じ薬を服むと、おならにもその匂いが出る。当然のことと言えばそれまでだが、わびしい限りだ。作者は川柳塔社副理事長だったが、去る八月十六日死去。雅号はタクシー会社経営に由来する。「重荷おろして人生は何だった」

(10月22日)

闘病の悲しきファッション寝巻シヨ

上西セツ子

若い身で闘病生活を余儀なくされる者にとって、まして女であれば、せめてパジャマやガウンにファッション性を盛り込んでおしゃれを楽しむのは人情であろう。女患病棟は派手な寝巻シヨだ。「退院へ爪先ゆるい足袋を穿き 西尾栞」

(10月23日)

足袋少しきつく女は旅に出る

正本 水客

十月は、十二日が芭蕉忌、今日が広重忌で、旅に人生を磨き名を挙げた人達と縁が深い。作者は元国鉄マン。無上の旅好きで全国足跡を記さぬ所がない程である。この句、女の旅どころが色濃く出ている。「月横に動くと見れば汽車曲る」

(10月24日)

みんな皆笑顔でみんな皆他人

岩田 美代

笑顔の裏側に潜む他人の冷たさを大胆なフレーズを重ねて巧みに表現する。再読、三読してみると「みんな皆」の効果が理解出来る。呪文のような不思議な言葉だ。みんな皆・笑顔・他人の語句だけのシンプルな構成が力強い。

(10月26日)

わだかまり酒でもつれて酒で解け

西田柳宏子

酒は泣き笑いの人生を一入味わい深くする。人間関係のもつれたり解けたりは、酒の飲み方如何にも関わるようだ。「人酒を飲む、酒酒を飲む、酒人を飲む」とことわざにあるが、すべからく「酒に十の徳あり」の様を酒でありたい。

(10月27日)

誕生日飲んで喋ってみな帰り

笠原 吸江

四半世紀前頃から家族制度は崩壊の一途をたどり、核家族単位の生活様式となった。作者は、誕生日を祝ってくれたものの、その日のうちに帰ってしまう子供達を淋しむ。女性と間違えそうな雅号は、故郷である岡山県の吸江湾に因む。

(10月28日)

数珠持つてするパチンコの高野山

八木摩天郎

真言密教の霊場、高野山に参詣してのこと、バスの時間待ちでもあらうか、パチンコ玉をはじく。今しがた奥の院にて手を合わせ、苔むす墓群の中を通過して来たばかりなので、片手には数珠を持ったままだ。念仏申しても玉には通じない。

(10月29日)

勝ちいくさ幕がおりてもむなしかり

天正 千梢

四月二日未明、アルゼンチン国軍が突如フォークランド諸島に上陸、不法占拠の暴挙に出るや、英国は四十九日目に本格攻撃を開始し、これを鎮圧、六月十四日には暫定的停戦を結び、七十四日戦争を終結した。勝者にも残る空しさ。

(10月30日)

滅亡の地球に残る蝶一つ

吉川雉子郎

新聞柳壇のトップを切った日本新聞の新題柳樽は明治三十六年に始まる。吉川雉子郎(英治)は明治四十四年二月から登場してくる。これは翌四十五年の作、選者の井上剣花坊は「滅亡は最後の葬也、一つ残れる蝶は神か非か」と評した。

(10月31日)

眼が覚めりゃ丁度映画は済んだ処

西森 花村

十二月一日が映画の日となっているのは、明治二十九年十二月二十五日に神戸の神港クラブで、エジソンのキネトスコープが公開されたことから、昭和三十一年に決められたもの。映画館へ居眠りにくるのも年配者の避暑避寒の手立てだ。

(12月1日)

受話器まで毛糸でつつみ冬支度

榎本 聡夢

蓑虫は糸を吐き出し、枯葉などをまとって早早と冬の支度を終える。家庭の主婦として十二月に入ると冬への用意を怠りなく済ませねばならぬ。電話機にまで冬用のカバーをかけてやったのを句にしたのは、作者の慧眼というものであろう。

(12月2日)

眼を閉じて過去ふりかえる霧の庵

西村句楽坊

作者は男山の麓の律寺の和尚だったが、晩年に麻生路郎に師事し、作句を楽しんだ。筍の回る季節には朝掘りのそれを丹念に煮き込み、多くの川柳家に振る舞った。この句、閑静な晩秋初冬の庵で一年をふり返る姿がほうふつとする。

(12月3日)

たわし二個すり減り一年めぐり来る

内藤きさ子

これは主婦の暮らしの中での歳晩の感懐である。年の始めに新しくおろした亀の子たわしの二つ目がすり減ったことに、台所の一年が集約されてきているのだ。化学製品のそれではなくて亀の子たわしであるところに、句の味が出ている。

(12月4日)

値切ってる妻を離れたとこで待ち

川村 好郎

早いところではボーナスが出て、新年の用意や贈答品などの買い物の季節を迎えた。夫婦連れ立って出かけたものの、買い物上手な妻は必して定価では買おうとしない。男にはきまりの悪いことなので、少し離れて見守る他はないのである。

(12月5日)

三越の商品券を陽にすかす

高杉 鬼遊

庶民には到底考えることの出来ない膨大な金を動かす、罪に問われた三越百貨店の前社長の醜聞は、三越の威信を失墜させた。作者は、その生臭い雰囲気嫌悪の極みを覚えたので、思わず商品券までも陽に透かし見るのだった。

(12月7日)

寝入ったも起きたも駅の名で答え

近江 砂人

夫婦での旅に寝台車を利用した。夫は妻をいたわるように、よく眠れたかと聞く。妻は、寝ついた頃、目の覚めた所を告げるのだったが、それは駅の名前で覚えていた。夢うつつの中での駅員の呼び声もうかがえ、旅情こまやかである。

(12月8日)

明治百年漱石しずかに売れている

伊藤 定子

作者は国鉄マンだった夫君とのおしどり川柳家、愛情こまやかな眼で対象を見つめる。この句も、文豪夏目漱石の持ち味を言い得ている。漱石は大正五年の今日五十歳で没した。「漱石忌全集既に古びそむ」は日野草城の俳句。

(12月9日)

十二月まがりくねったところで飲み

麻生 路郎

忘年会の季節、ボーナスの端数ぐらひは平素のストレス解消に飲んでよかるう。俺の顔お前の顔とあちこち回る二次会三次会の気分が旨く表現されている。「十二月首だけ入れて呑んで行く」は屋台の酒、野良犬の影がまつわる。

(12月10日)

友だちは男に限る昼の酒

岸本 水府

麻生路郎の句に「女のいない酒はさびしき」というのがある。それもよし、これもまた良き酒であろう。戎橋あたりでひょっこり出会ったなつかしい顔と、どちらともなく杯を交わすことになる。「昼の酒」に五十九歳の水府が見える。

(12月11日)

妻に字を聞いて知ってたことがなし

中尾 藻介

味わい深い句で定評のある作者は、ここでは結語に小太刀の刃えを見せる。妻に字を聞いても無駄とは思いつつも試しに聞くと、案の定知らぬと答える。「妻をめとらば才たけて、みめうるわしく情ある」とは行かぬのが庶民の味だ。

(12月12日)

羽子板にまだ生きている成駒屋

木村 十悟

「頬冠りの中に日本一の顔 岸本水府」初代中村鴈治郎の舞台姿を詠んだ佳什は既にこの欄で紹介済みだが、羽子板でも勸進帳の弁慶とともに、長らくその華やかさを競った。十七日から三日間、浅草の浅草寺で羽子板市が開かれる。

(12月14日)

賀状書くスピード落し思うこと

宮田 不二

歳晩のあわただしい中で年賀状を書いて一年をしめくくる。沢山の宛名の中には深い感慨のまつわる人がいて、しばし筆を止めさせる。虚礼廃止を言われてから久しいが、当分すたりそうにない。「年賀状女将の書いたものでなし 岡田夜潮」

(12月15日)

胸の花はずし自分をとりもどす

山田 菊人

多数の人の集まる所で、胸に大きな花をつけて自己を誇示するのは、政治家に共通したものだ。作者も一日大きな花をつけて貰ったが、何となく身にそぐわず、かえって身の縮まる思いがした。氏はまた絵も堪能で番傘誌の表紙を描く。

(12月16日)

参政権女は諸の方がよし

戸倉 普天

昭和二十年十月幣原内閣が、十二月十七日婦人参政権の新選挙法が、それぞれ成立した。現在の感覚では女性に叱られそうな内容だが、約四十年前の実情は、正にこの句の通り飢えの時代だった。氏は戦前、日本絹織の専務の要職にあった。

(12月17日)

所得倍増よせよせ酒がまずくなる

魚住 満潮

昭和三十五年七月池田内閣成立、九月に自民党は、わが国経済の高度成長、国民所得倍増政策を発表した。作者は庶民としての直感から直ちに反発する。酒にことよせて、その政策の先行きの行き詰まりを見事に言い当てているのである。

(12月18日)

貧民窟神様の誤植でした

西川 晃

人類すべて平等であるべきが理想。現実には貧富の差、強弱の別などその隔絶ぶりは甚だしくなる一方だ。この世にスラム街のあること、神様の手落ちではないかと訴える。同じ作者の「無から有生じ神殿華麗なる」と較べて興味深い。

(12月19日)

開けにくい戸を押売りが軽う開け

中川 滋雀

近頃見られなくなった押売り、かつては歳末の抜き差しならぬ暮らしぶりへの一点景でもあった。表戸の車のきしみ具合で、開けたてに家人も手こずるようなのを苦もなく開ける、その手なみに舌を巻くこともあったのである。

(12月21日)

アル中の箸から海鼠すべり落ち

後藤 梅志

「冬至なまこ」と言われるように、寒が厳しくなるにつれ、なまこやこのわたの味が冴えて来て、酒徒には得も言われぬ季節となる。多少、手先にふるえのきた趣の人物を、このように表現の過不足なしに自然に描写出来る手腕は見事だ。

(12月22日)

ホテルにはあらずネオンの曾根崎署

石井 黙平

曾根崎署は歳末特別警戒実施中で、大大阪の玄関口を預かる署らしく、地階にも警官が詰める。地上は十一階、留置場まで冷暖房の完備した現在の建物は、昭和四十八年五月に竣工した。屋上のネオンは石油シヨック後一時消えたことがある。

(12月23日)

突風へマルビル廻りそうにたつ

江口 度

都会には都会独特の風が吹く。ビルの谷間を歩いていると、風の道がよく分かる。時には突風かと思われる激しさに、ふと見上げたマルビルは、独楽のように回っていきそうに錯覚する。大阪駅ビル「アクティ大阪」の完成も近い。

(12月24日)

少女祈るエスさま風邪をひかぬよう

林 夢虹

日本のクリスマスは、デコレーションのクリスマスだ。ツリーもケーキも音楽も、おしなべて騒がしい。キリストの磔像の裸形を目にして、幼い少女が「風邪をおひきにならぬよう」お祈りをしてさし上げる。祈りこそ降誕祭にかなう。

(12月25日)

師走風手にも持たぬさびしさよ

杉田絵己子

師走風というのが、木枯らしと言うのと違って、浮世の俗塵めいた感触をもたらず。寒風に背を押されるに、買物物の包みを抱えることもないのは、淋しいことに思えるのである。「木枯しにわたしを置くと貧しい絵 有信新之助」

(12月26日)

机拭いてわれに聞かせる言葉あり

木下 愛日

今日、御用納め。机上の書類を整理して、この一年の仕事を振り返る感懐であろうか。それとも、定年を迎えるに当っての職場への愛惜の吐露であろうか。ともあれ、自愛の心情のこもる句からは、明治生まれの矜持がうかがえる。

(12月28日)

永い夢とお忘れ下され候かしこ

竹久 夢二

はかない夢ではない。充実した永い夢だったが忘れてくれと言うのである。多彩な女性遍歴を経験した夢二の名作、美人納涼や黒船屋に描かれた女性から、このような別離の書状を受けたならば、男ごころはどんなに揺れ動くだろうか。

(12月29日)

黄昏でなく夕映えの日を希う

田中 正坊

胃を手術した夫人を中心の、家族ぐるみの句集「茜雲」所載の句で、作者は「誰そ彼は」と見分けのつき難い暮れ様より、夕焼ける明るい日暮れを喜ぶ。「明日もまた無事の日続けあかね雲」にも、夫人の快癒への切なる祈願がこもる。

(12月30日)

年の暮話の奥に春があり

古川 柳

歳末の会話に「いざれ新春に…」との言葉が交わされる。庶民は大節季という関所さえ越せば、のどかな正月が約束された時代の句だ。さて現代、何ものにも優先させて世界の平和を願いたい。「神国にまたなりそうな初詣 山本葉光」

(12月31日)

一行詩

これが私の墓だとは



noji,

別宅に置くのは最新式テレビ

荻田千代三

一九五三年、NHKでテレビ本放送開始、今日三十周年を迎える。この間受像機は小型化し、モノクロからカラーへ、ワンタッチからリモートコントロールへと目まぐるしく変遷したが、わが家のは常にいささか流行遅れの気味がある。

(2月1日)

ホンコンで遊んだ月賦まだ払い

高橋千万子

一九五四年、日本航空国際線開設。サンフランシスコ線・沖縄線が就航した。昨年航空機を利用した海外渡航者は四百万人を超えたといわれる。中にはローンを利用しての観光旅行を楽しみ、返済に苦しんでいるむきも多かろう。

(2月2日)

アメリカの大豆を撒いて福は内

田中 南都

節分の今日、豆を撒いて悪鬼災難を払う行事を行うが、撒くのはアメリカの大豆なのである。大豆の自給率四パーセントのわが国にとって耳新しくもないが、アメリカとの共同体を強調したばかりの首相への、今日の諧謔を感得する。

(2月3日)

歌麿の頃から女鶴を折り

岸本 水府

立春大吉、厳しい冷えの中に華やいだ兆しを感じる。日本の美しい伝統の折り紙の中でも、おめでたい婚礼の意匠や折りの象徴の千羽鶴で庶民に親しまれている鶴は、その代表格であろう。「折鶴になったら紙が呼吸する 遠山可住」

(2月4日)

立ち呑みでころして帰る腹の虫

飯田 悦郎

立って飲む酒は飲むというよりあふるといふ表現がふさわしい。コップの酒を水のように一息に飲むので、胃までストリートにしみわたる。時には、それが焼酎であったりするのでいかにも見事だが、腹の虫を殺すにはこれに限るのである。

(2月5日)

人はひとおれは俺だが和にしかず

岸 南柳

麻生路郎門の一人、寺田町で理容「男前」の店を営む。路郎は終生ここで頭を刈った。戦後理容界の立て直しに功あり、組合理事長も務めた。昭和三十九年三月建立のこの句の句碑は、現在、府理容環境衛生同業組合の奥庭にある。

(2月6日)

陰口の火鉢へ坐るところがなし

片山 雲雀

昭和五十八年二月六日発行の「雲雀句抄」に所収。火鉢を囲んだ車座に噂の花が咲いている。やあやあど割り込んで話の継ぎ穂をとる雰囲気ではないので、氣づまりな様子でしばらく控えていなければならぬ。陰口は嫌なものだ。

(2月8日)

ときすでに九回裏のスペンサー

堀口 塊人

この句、阪急ブレーブスの助っ人だったスペンサーの豪打ぶりが思い出される。スペンサーがホームランを打ったとて焼け石に水、敗色の濃い戦局なのである。昭和十一年の今日、日本プロ野球の第一戦巨人対金鯨が鳴海球場で行われた。

(2月9日)

膝の犬これが獣であるものか

中尾 藻介

犬は飼い主に似ると言う。心が通じ合えば互いに影響を受けるせいだろうか。喜怒哀楽を切々と、心遣いまでもしてくれる愛犬は、もはや畜生ではない。誰よりも生活に潤いをくれる。それ故にか、作者の白髪は近頃頓に飼犬のマルチーズに似て来た。

(2月10日)

埴輪楚々時の帝に殉じた目

片岡つとむ

円筒の上に人物や動物をかたどった形象埴輪たちであろう。土器で作られた素朴な像の目は清らかで可憐である。垂仁紀に「其の土物(はに)を始めて日葉酢媛命の墓に立つ」とあり、王族の古墳の周りに死者を守る姿で埋められた。

(2月11日)

パトロンが帰ると猫が戻って来

傍島 静馬

犬と違って猫は贅沢だ。主人の顔色などがうことなく気づい気ままに暮らす。執念の深さは、恋猫の声や喧嘩の手練で舌を巻かせる。二号さんの猫、暫時ベランダへ放り出されていたがノンシャランとご帰還、複雑な動物ではある。

(2月13日)

公園の裸婦に陽の刑雪の刑

藤田 泰子

一読俳句的発想の句だが、内容といい構成といい手堅い作品である。ブロンズや石膏の裸婦像に、夏は直射日光が、冬には積雪が肌をさいなむ。それらを自然の責め苦、刑罰と見たわけで、女性の繊細な感受性の所産と言うことが出来る。

(2月15日)

税金をさうかくと払ろた夢

水谷 鮎美

所得税を給料から天引きされるサラリーマンは別として、確定申告期の納税者は頭が痛い。この句、税務署の係員の前でおうように応対するわが姿に、夢の中ではあるが溜飲を下げたもの。「一度なりたや税金を使う身に 清水白柳」

(2月16日)

煙草一本最敬礼をして乞われ

魚住 満潮

不景気が長引くと失業の波をもろにかぶるのが日雇いの労働者である。しばらく姿を見ないでいた浮浪者が、近頃また天王寺公園やターミナル駅構内で目につくようになった。煙草を所望して、貰うと、実に丁寧な謝意を全身で表わす。

(2月17日)

政治屋に悼まれている博徒の死

西川 晃

政治家が一国の経綸に参与するまでには計り知れない金を必要とするので、ともすれば利権を漁りがちとなる。暴力団もまた利権へは手段を選ばぬところがあり、相通ずる者同士の故か、博徒の告別式には政治屋の花輪が麗麗しく飾られる例を見る。

(2月18日)

草の芽が出たぞおしっこさせながら

橘高 薫風

今日は二十四節氣の雨水で、もの芽が吹き始める季とされる。日の当たる縁側から赤子におしっこをさせたとき、庭の隅に青いものが顔を出しているのを見つけて、春の近づいたのを知った感慨を氣どらず述べたものである。

(2月19日)

仏壇の姑が気楽さ笑ってる

神夏磯道子

古川柳に「死に切って嬉しそうなる顔二つ」という姑の死に臨んでの若夫婦の表情を描いた句があるが、(俳風柳樽通積の解)これはその現代版。姑も姑だが嫁も嫁、その確執の絶えなかった家の空気も和んで来た。姑は仏壇からそれをたるみだと見ている。

(2月20日)

如月や江下北川作江たち

高杉 鬼遊

昭和七年一月二十八日、第一次上海事変勃発。戦場の花と散った爆弾三勇士の魂魄は、五十年余を経て安らかに鎮まりいるや。「廟江鎮の敵の陣 我の友隊すでに攻む 折から凍る二月の二十二日の午前五時」と頭彰の歌は残れど。

(2月22日)

落ちそうな椿に言葉かけて行く

岩田 美代

椿は寒気の最中にも燃え立つ真紅の灯をともしけなげな花だ。そして耐えに耐えた上で最後には、わが首をころりと落とす思い切りのよさがある。作者は、そのような椿に己と相通ずるものを感じて、声を掛けざるを得なかったのだ。

(2月23日)

ぼんぼんは紙の裏表も知らず

北川 春巢

苦勞知らずのぼんぼんは、一枚の紙にもおのずから表と裏のあることもわきまえぬ世間知らずでもある。作者はそのような人物を通して、万物にはすべて規矩本末のあることを喝破する。けじめをおろそかにする昨今の風潮への批判か。

(2月24日)

出世してみれば半生傷だらけ

生島 鳥語

世間に出ていけばし人に知られる程の地位を得るには、それ相当の努力が必要だし運もともなわねばならぬ。また、人を押しつけるような人間性にもとることさえ行わねばならぬ時も多かろう。半生を省みて、深く恥じ入るものがある。

(2月25日)

梅一輪追放の師の部屋に咲き

岩崎 柳路

作者は戦前、張家口でキャバレー東亜会館を営んでいて、麻生路郎の朝・満、華北・蒙疆への二度の旅の面倒一切を見た。「わてと師の路郎とは川柳を通り越した人間的にも格別な間柄でっさかいな」が口癖。句は人物の潔さを強調している。

(2月26日)

臨終が冬ならいろはおくりで逝かんかな

麻生 路郎

路郎は七月に生まれ七月にこの世を去った熱の人だったが、最晩年に辞世ともとれる句を発表した。十歳で大阪に移り六十七年間を浪花の地で暮らしただけに、殊の外文楽を好んだ。葬儀には「寺子屋の段」の録音テープを流した。

(2月27日)

たばこの火つけてまだある妥協性

房川 素生

労使の交渉であろうか、父子のつきつめた対立であろうか。息づまる話し合いの途切れたところで上座が煙草に火をつけた。火をつけたことにまだまだ妥協の余地の残るを感じたのである。明治三十七年の今日、煙草専売法が公布された。

(4月1日)

役人のほねっばいのは猪牙に乗せ

古川 柳

「金銭は命にも換えがたい宝、それを贈って役付きを願うはお上への忠」と言ってはばからなかった田沼意次と子の意知にない、賄賂政治は世に横行した。現ナマを受け取らぬ硬骨漢は、ちよき舟に乗せ、吉原で酒色をもってまるめこむ。

(4月2日)

ポスターにない故郷を愛すなり

中尾 藻介

絵葉書やポスターで宣伝される故郷は、言わば取り澄ました顔のそれだが、離郷以来懐しんで来たのは、そのような故郷ではなかった。小学校の裏庭の櫛の木や、それに止まって鳴く山鳩の声など、まるで取るに足らぬものなのである。

(4月3日)

鏡台に嫌いな刷毛と好きな刷毛

武内 紅子

女性にとって事化粧に対する関心は、男性には計り知れぬものがあるに違いない。殊に舞台俳優や芸妓といったプロのメーカーは複雑で、刷毛（はけ）や櫛（くし）なども多くの種類を必要とする。演劇界に生きる作者らしい情感がこもる。

（4月5日）

寝くたびれいろは送りをくり返し

花月亭九里丸

昭和三十六年の「川柳雑誌」八月号所載。「いろは書く子をあへなくも、ちりぬる命是非もなや……剣と死出の山けふこえ、あさき夢見し心地して……」が浄るり「いろは送り」の文句で、あさき夢見を繰り返したのが句想になっている。

（4月6日）

人恋し人煩わし波の音

西尾 栞

煩わしい人間関係を逃れて静かに打ち寄せる波音を聞く身ではあるが、悲しいかな、人間の弱さは孤独にも耐え難く、人間雑鬧（じんかんざつとう）を恋う心情に傾いて行く。今日、なにわ会館で、西尾栞作品集発刊記念句会が催される。

（4月7日）

ソプラノが一人まじってお念仏

安藤寿美子

四月八日は花祭、灌仏会である。花で飾った小堂に釈尊の像を安置して、頭から甘茶をかけ、それを持ち帰って頂く。この句、今日の行事とは何のかかわりもないが、導師に倣って唱和する中の一人の声に焦点を当てたところが面白い。

(4月8日)

天守から昔殿様見た桜

若本多久志

お城には桜の名所が多い。天守閣から今を盛りと咲く花を眺める気分は、事実、殿様のように豪奢だ。大阪城の桜も立派で、今秋大阪築城四〇〇年まつりのイベント広場になる西の丸公園から花越しに見上げる天守閣は格別である。

(4月9日)

新劇に酔うて肥後橋桜ばし

磯野いさむ

朝日会館は昭和二十八年、文字通り幕を下ろして廃館したが、新劇、コンサート、映画など大阪のインテリジェンスをはぐくむ殿堂だった。新劇の舞台に酔った熱っぽい頬に川風が快く、梅田までその興奮を反芻

(すう)する青春があった。

(4月10日)

男みなもしゃくくくと悼みけり

石田 沐天

この句は、資性淡泊、正義漢だった作者そのものを表したように思える。出生地は堺市乳守、産湯は神戸市で使うと、川柳家戸籍調の稿にあるので、のっけから浮世の風にさらされた人生だった。極端に女性を嫌い、終生独身で通した。

(4月12日)

コーヒーをぐくりぐくりと飲むべからず

杉田絵己子

喫茶店で恋人と差し向かいで飲むコーヒーにも、女心は微妙に作用する。水を飲むような具合ではムードもあつたものではなく、恋人失格と言えよう。明治二十一年わが国初の喫茶店である可否茶館が東京上野の黒門町に開店した。

(4月13日)

北斎の描けぬ演習富士裾野

松尾柳右子

葛飾北斎の富嶽三十六景は、洋画の技法を採り入れた風景画の粹であるが「凱風快晴」に描かれた富士の裾野の樹林に自衛隊の散兵を匍匐(ほふく)前進させ、「山下白雨」の稲光に戦車の隊列を向かわせれば特異なパロディー画となるであろう。

(4月14日)

揚雲雀わが魂を持って行け

麻生 葭乃

「揚っても揚っても雲雀に空がある 小浜牧人」の句もあるが、小刻みに声震わせて、空の天辺へ登りつめようとするかのような雲雀は、詩人の魂を強く誘い込むかのようだ。それ故か西洋でも雲雀を詠った詩に名詩が多いと言われる。

(4月15日)

春うらゝはさみほうちょうかみそり研ぎ

須崎 豆秋

戦前にはさまざまな売り屋、修繕屋が町中へまで回って来た。子供たちは、それらを見ながら商売の知識や厳しさを会得したものである。この句、研ぎ屋の呼び声を利かして、郊外の陽炎の中から抜けて来たようなどかさ表現する。

(4月16日)

その傷を待ってたように吹き出す血

高橋 古啓

春、樹木はいっせいに芽吹き、花や葉をきらびやかに開かせる。人間として同じことだ。内にたぎるものあれば押しとどめることは出来ない。その傷を待ってたようにほとばしり出る鮮血に、作者はおのが身のうち的情熱を感じ取ったのである。

(4月17日)

ご主人をとりに行くよと仲が良し

大谷 弘平

女学生時代からの仲良し、「お互いに結婚なんかせんとこよね」と言い合っていたのに、一人が誓いを破って結婚した。その後も仲のいいことに変わりなく、このような軽口も飛び出すのである。神戸のふあうすと同人、泉南市在住。

(4月19日)

はやり風十七屋からひきはじめ

古川 柳

十七屋は十七夜―立待月―たちまちづき―忽ち着き―飛脚で郵便屋さんのこと。感冒も飛脚は早く取り継ぐとの誇張だ。古川柳には、かような難解句の謎解きの面白さもある。明治四年の今日、東京―大阪間に官営の郵便制度が発足した。

(4月20日)

愛憎にひと息入れる沈丁花

藤岡 花梢

かおりが沈香・丁字に似ると言われる沈丁花(ぢんぢょうげ)は香りが高い。人間の愛情のもつれの間げきに、一息ほっとさせるしじまをつくり出したのがこの花の香り、ひょっとして仲直りが出来たなら、花の香の功德と言える。

(4月21日)

党内で選挙合戦全国区

岡井やすお

今夏の参院選から全国区は比例代表制となるが、この新制度はすでに各種政治団体に少なからぬ混乱を来している。無党派市民連合は結成の前後に分裂脱退者を出したが、既成政党とて、選挙戦以前の党内調整に手こずることであろう。

(4月22日)

減税の期待は春のシャボン玉

広瀬 反省

経済界の低成長に歩調を合わせるように、不景気は長期にわたり根を張って来たが、オペックの石油の値下げは何よりだったし、私鉄のストの回避も、市民の感情を和らげた。さて、減税に関してはどうか。大中のシャボン玉の夢は。

(4月23日)

抱擁の目のはしに入る天守閣

谷垣 史好

大阪城周辺の公園か。青春を賛美するアベックたちの姿は明るく健康的だ。中には大胆な行為に出る組もあることだろう。男の目のはしに天守閣が映る。現代風なエロチシズムは、いかめしい天守閣により、ユーモアの味を加える。

(4月24日)

三味線がやんでそれから音もせず

中島 小石

蘇軾の春夜詩の一節、春宵一刻直千金を思わせる。歌管楼台人寂々と
して、ぶらんこ一つ深夜にしずまるのは古代中国の風情だが、日本の四
畳半趣味もまた捨て難い。爪弾きの三味に乗せる小唄、その後は息を詰
めたようなふたりで。

(4月26日)

内職に藤色があるたのしきよ

内藤きさ子

内職は、昔から利の薄い割に骨の折れるもので、袋張、ボタン付け、
その他単調な作業の繰り返しに、気分も減入りがちだ。そんな内職に藤
色の品物が交じって来た。人間とはおかしなもの、好きな色を目にする
だけでご機嫌になれる。

(4月27日)

当選にバツタの姿思へかし

麻生 路郎

府議選でのこと。一人の候補者が、両脇に揃いの帽子とスーツを着た
若い女性を従え、一斉に頭を下げていた。十秒間隔ほどで、それを無言
で無限に繰り返す。あの候補者は当選しただろうか。当選して一人前の
政治が出来るのだろうか。

(4月28日)

身を潔く持つ天皇と同年

藤島 茶六

作者は、明治三十四年二月五日の生まれで、日本川柳協会三代目の理事を務める。「偶然」という課題でひょいと出た句ながら、陛下はご長命でいらっしゃる、自分も健やかにいるということ、いよいよ愛着深まる作品となる。

(4月29日)

保津川を下るひとりの労働歌

松田 巖

働く歌である。筏師が息をのむ急流を越えて悠然と唄う喉の良さは、五月晴れの舞台にふさわしい。伊藤左千夫は「牛飼が歌よむ時に世のなかの新しき歌大いにおこる」と詠じたが、「ひとりの労働歌」もまた新しき歌と言えよう。

(4月30日)

写真屋が飼うてゐるような奈良の鹿

神谷娛舎亭

奈良は歴史の町だけのことではあって、至る所が絵になる。そして鹿の存在が一層奈良らしさを引き立てる。六月一日は写真の日。天保二年のこの日、日本で最初に上野俊之丞がフランス製の写真機で、鹿兎島藩主の島津斉彬を写した。

(6月1日)

さびしさはこの花道のあのあたり

松本 波郎

昭和十年、初代中村鴈治郎の死去に際しての追悼吟。当たり芸だった紙治の舞台姿と、冥土への旅立ちが二重うつしに迫ってくる。二代目も上方歌舞伎を代表する人間国宝、初代の五十回忌を来春に控えての急逝はここから惜しまれる。

(6月2日)

あの人もあの妓も消えた法善寺

二代目 中村鴈治郎

法善寺界限は、戦前は芝居裏と呼ばれた歓楽街に近く、「夫婦善哉」の柳吉・蝶子活躍の舞台でもある。二代目鴈治郎は、初代の座付作家だった食満南北らの影響で大正初期から川柳を作句していた。「かげばやし客には見えぬ文化財」

(6月3日)

直された癖で謡っている謡

後藤 梅志

中学で初めて英語を習った時、英語の先生は「英語の発音は、最初に教わった教師の発音が、終生身についてまわるものだ」と言われた。作者は観世流の謡曲を教えていたこととて、師匠と同じ抑揚での謡いぶりか手にとる様に分かるのだ。

(6月4日)

静や静頼朝の眼と政子の眼

戸田 古方

義経と吉野で別れた静御前は捕えられて鎌倉へ送られた。鶴岡八幡宮で源頼朝・平政子らの前で義経恋しの舞いを舞う。あでやかな姿に見惚れる男の眼と、女の嫉妬の眼差しの対照が効果的だ。皇紀二千六百年記念の詠史川柳中の一句。

(6月5日)

その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ

麻生 路郎

その日暮らしの長屋のわび住まいへ、雀が巢をつくり雛を育てる。藁すべを運んでいた親鳥の姿から、やがて一番子が生まれ、黄色い嘴から黄色い声が聞かれるようになる。五、六月から八、九月まで繰り返し返される平和で庶民的な子育て団欒。

(6月7日)

そもくの嘘の初めのゴム乳豆

奥村 丹路

嘘八百、嘘も方便、嘘つきは泥棒のはじまり、嘘から出た実、と、この世は嘘で固められている。その嘘の世の中で赤ん坊に与えるゴム乳豆（乳首）がある。大げさに言って、人生のしょっぱな、だまされ初めのゴム乳豆なのである。上句絶妙。

（6月8日）

光頭会髭は大事に大事にし

小西 無鬼

路郎門。昭和二年から川柳をはじめ戦後関西配電川柳会を作る。郷里篠山でも川柳活動を活発に行い、昭和五十二年、兵庫県ともしび賞を受賞する。句集「草鞋酒」がある。句は、カイゼル髭の人物の、頭髮と髭との関連を興味深く捉える。

（6月9日）

長針から見た短針の怠けもの

米浪進之助

時計の二つの針の動きをあっさり擬人法で表現した変哲もない句であるが、川柳塔の句会で、故岡橋宣介が選をした兼題「時計」の高点句であることで興味を持たせる。宣介が晩年孫を淡淡と詠んでいた簡明さがこの辺にもうかがえるのだ。

（6月10日）

私にもどる机にもどる雨の午後

高橋 夕花

朝、主人や子供を送り出してからの主婦はひとしきり家事に精を出す。昼ご飯を食べてほっと一息ついたところで白い雨足に気づいたのである。机に向かつて落ち着いたひとときを過ごす。句の仕立ても上乘だ。今日、暦の上での入梅。

(6月11日)

伊予柑の皮傷つけて香を賞でる

田中 淑子

作者のはじめて作句した川柳は、胃癌の手術に臨む感慨であり、昨年五月のことであった。以来川柳一途、三月と言われた命が十一カ月に延びた。再入院時のこの句をはじめ五百を超える作品が、句集「羽ぶとん」として今日発刊になる。

(6月12日)

竹槍は切り落しても元の槍

古川 柳

竹槍は恐ろしい。切り落しても形は元の切っ先鋭い竹槍に変わりがないのだから。竹槍は下積みの農民の象徴でもある。六月十三日、山崎天王山で羽柴秀吉の軍勢に敗れた明智光秀は、その夜、小栗栖の土民長兵衛の竹槍にかかり絶命した。

(6月14日)

お花畠の優しさも抱き一万尺

吉岡 規子

六月は、第一日曜日に上高地でウエストン祭、中旬に八ヶ岳や南アルプスの山開きがある。三千メートル級の山を一步一步登り続けて、雪溪を見はるかすところ、お花畑の彩りにたちまち汗が引く。厳しい山の一面をとらえた女性らしい作品。

(6月15日)

もう六十まだ六十と紅を引く

柳原 静香

女の願いで美に優るものはない。老境にさしかかると化粧にも心の陰影が作用して、ある日には、もう六十の感慨で、別の日には、まだ六十の思いで口紅をさすというのである。「もう」と「まだ」の使い分けが句を引き立たせている。

(6月16日)

それだけの薬をアンタのむのかい

神谷凡九郎

厚生省の発表では、昭和五十六年度の国民医療費の推計は、十三兆円に迫り、医療機関の患者に対する検査と薬漬けは限度に達した感がある。多種多様、色もとりどりの薬を投与された患者に、思わず慨嘆の声を発した作者なのである。

(6月17日)

一度だけ妻にお礼は言うつもり

山根いつを

「一生をオイコラハイで終りたる 岡田夜潮」という句がある。封建時代の無自覚な女、忍従を強いられた妻を詠んで余すところがない。そのような関白亭主といえども、生涯に一度、しみじみと礼を言うときがいつかはあるに違いないのだ。

(6月18日)

父無し子強い男に憧れる

納 糸葉

ててなし子、早くから父と死に別れた子、あるいは私生児と解釈しても当を得ている。母子家庭という世間の日蔭で、遠慮がちに育った娘ゆえに、男らしい強い男性に憧れることとなる。人間の足らざるものへの渴望の如何に切なるか。

(6月19日)

英語でしゃべり日本風に笑い

早川 清生

日常の会話を見ても、表情の身ぶりの豊かな外国人にくらべ、日本人は極端に貧しい。国際会議での日本代表の3Sは有名な事実だ。即ち、サイレンス(最少発言)、スリープ(居眠り)、スマイル(照れ笑い)。

(6月21日)

月のかさめぐり逢わねばただの暈

時実 新子

人は恋をする。人の恋は複雑だ。物心がつくやあわあわと、長じては火のように烈しく、異性を慕う。これは青春讃歌、あなたとめぐり逢った時から月のかさも心を持つ。まじり気のない思慕だ。「耳の形が思い出せない好きなひと」

(6月22日)

希望ヶ丘に当然お年寄りもいる

岩井 三窓

旭ヶ丘があれば夕陽ヶ丘がある。希望の丘があるから失望の丘もあるのが人の世であろう。しかし、青少年に希望を抱かせぬ世は尋常ではないのと同じに、老人に失望の思いをさせる政治はどうかしている。老齡者にこそ希望と愛の光を。

(6月23日)

恋人の坐ったとこへ坐って見

須崎 豆秋

恋人が今しがたまで坐っていた座布団に坐る。ぬくもりの残っているうれしさ。結語が適切で軽妙な味を深めている。豆秋作品の洒脱は、大阪弁を駆使してのたまもの。川柳に滑稽を取り戻したい。「折詰をあんじょ女給にいかれたり」

(6月24日)

迎ひ酒時に孔子はどういうた

川上 日車

二日酔いの気分の悪さを直す酒が迎え酒だ。自己嫌悪にさいなまれての自問自答か。「ところで孔子さんはどうおっしゃったかな」「七十歳で思うままに行っても道に外れぬようになられたとさ」「吾が輩は七十にはまだ程遠いぞな」

(6月25日)

表札に書いて我が名に一寸惚れ

中島生々庵

表札に中島蓬太郎と書き、雅号も書き添えた。ともに貫祿のある名だと、思わず顎を撫でそうになる。日本川柳協会前会長で謹厳そのもののお人柄だが、微醺を帯びてタクシーに乗ると、三休橋の蕎麦屋だと言うユーモアも持ち合わせる。

(6月26日)

悪人へ陽は燦々と惜しみなく

麻生 葭乃

女流の作品ながら世の不条理に触れて腹から慷慨する。芝居好きの作者は「悪人が栄えたままで初日果て 食満南北」を踏まえたと見える。芝居は概ね勸善懲惡で終わるが、現実には悪の栄えるためしがついて回る。川柳はまた悪を刺す。

(6月28日)

灯の色がはたちではない戎橋

岸本 水府

昭和二十七年水府は還暦を迎えた。「還暦はよし友達が二千人」などの句とともに茫茫四十年の昔を振り返る。日に一度は橋筋や千日前をぶらつかねばおさまらなかつた青春、友達、川柳。「還暦はよし川柳が一万句」とも言えただろう。

(6月29日)

一行詩これが私の墓だとは

麻生 路郎

路郎は還暦の年、「六十一まだ情熱は燃えに燃え」となお将来を指向した。専門家なき世界は発達せずと無暴な職業川柳人を宣言した闘志は死ぬまで衰えはしなかった。大阪が生んだ巨匠、路郎と水府は昭和四十年相次いでこの世を去った。

(6月30日)

あとがき

朝日新聞大阪版に、朝日なになわ柳壇が創設されて間もなく、大阪版の紙面刷新があり、大阪版のタイトル額下の欄に、大阪の川柳人の作品を毎日一句紹介させて頂けるようになった。とりあえず一年間ということで始まったのが三年になり、片岡つとむ氏と隔月交代の担当だったので、それらの句は四百五十句を越えるまでになった。このたび一冊にまとめるに当り、序文を藤沢桓夫先生にお願いしたところ、即座にご執筆下さったことはこの上もない光栄で、心からお礼申し上げます。

殊更大阪らしい句を取り上げたわけでもなく、どちらかと言えばその日の出来事に因んだ句が多いので、序文のお言葉のような大阪の味を存分に出せないで仕舞ったが、前句附の時代には江戸に先んじ、現在関東を凌ぐ関西川柳界の作品から、大阪の川柳人のところを汲み取って頂ければと思う。

なお、六大家と称された作家をはじめ、名のある作家には、大阪以外にも少なからず登場して頂いた。また、烏澁がましくも自句を取り上げたのは、朝日なになわ柳壇の選者の作品をも紹介するよう申し入れがあったので、片岡つとむ氏の作品とともに数句ずつ掲載したわけである。

これら数多くの川柳作品の、「川柳て、こんなにええもんだっせ」との呼びかけに、多少なりとも川柳へのご理解を深めて頂ければ幸いこれに過ぎません。

昭和五十八年九月二十二日

橋高薫風

— 索引 —

あ

鮎の口むかし役者の似顔より 川上 日車……一五
朝の鳥瞰動くものみな大阪へ 早川 清生……一六
アベニューらしく灯のつく御堂筋

あたたかい手から冷たい手へお金 戸田 古方……二一

哀別の妻がふりむく洒落一つ 田中 南都……二三
桑原 狂雨……二六

秋の風針の穴より来る如し 大石 文久……二九
足洗いし女に履くものをやらす

アッパッパ恋の勝利者とは見えず 広瀬 挽郎……五八

市場没食子……六五
秋ざくら痛みをわかち合っている

河野 君子……七二
赤い羽根良民証のように付け 斎藤 清幸……七三

あの頃の五円が残る貯金帳 福永 泰典……七四
悪人の遠い記憶にある絵本 石川 勝……七七

暁を抱いて闇にゐる蕾 鶴 彬……八五
あじさい寺の冬を想像せぬことだ

雨の夜を按摩殺されそうに去に 小出 智子……九二

逢う場所は少しキザだが紀伊国屋 松本 波郎……九六

雨だれは肺の中までぬらすなり 谷垣 史好……一〇七

雨ぞ降る渋谷新宿孤独あり 木下 幽王……一一一
川上三太郎……一一一

あじさいの着道楽にも似ておかし 西出 一栄……一二二

悪役に徹し得難い顔になる 高田 博泉……一二三

秋の水人それぞれに昔あり 岩田 美代……一二九

赤い羽根つけて脱線せぬデート 平松 圭林……一二六

赤とんぼ俊徳丸の塚を翔ぶ 香川 醉々……一二八
開けにくい戸を押売りが軽う開け 中川 滋雀……一四〇

アル中の箸から海鼠すべり落ち

後藤 梅志……一四一

アメリカの大豆を撒いて福は内

田中 南都……一四七

揚雲雀わが魂を持って行け

麻生 霞乃……一五九

愛憎にひと息入れる沈丁花

藤岡 花梢……一六〇

あの人もあの妓も消えた法善寺

二代目 中村鷹治郎……一六四

悪人へ陽は燦々と惜しみなく

麻生 霞乃……一七一

い

一歩いずればわれ旅人となる心

西尾 菜……一〇

院長があかんいうてる独逸語で

須崎 豆秋……一三

いづもやで父たり夫たり子たり

水谷 鮎美……一四

一本の外はどうでもよいテープ

小林 橙舎……三二

命まで賭けた女でこれかいな

松江 梅里……三九

いつわりを庇うかたちで足袋を履く

窪田久美子……四四

市場籠持つひとときを女医愛し

土井 文蝶……六〇

いざさらば膳をまたいでかくし芸

大石 文久……八二

一本の針の一生かも知れず

亀山 恭太……九二

一ヶ所は和漢へ響く時の鐘

古川 柳……一〇

一匹狼の薬瓶とはさびしいな

羽原 静歩……一二

遺髪が戻り遺骨が戻り本人が戻る

麻生 路郎……二三

伊予柑の皮傷つけて香を賞でる

田中 淑子……六七

一度だけ妻にお礼は言うつもり

山根いつを……一六九

一行詩これが私の墓だとは

麻生 路郎……一七二

う

美しいコップは美しく叛く

森中恵美子……一二

嘘嘘嘘木魚の音もそうひびく

麻生 霞乃……一八

宇宙船の真下日本は盆踊り

青木 三碧……六五

美しく産みだし壁に聖母像

小浜 牧人……八五

売られたのは三味線に手のとどく頃

岸本 水府……九八

浮き草は浮き草なりに花が咲き

中島生々庵……一八一

うつくしき刺青を見るきりぎりす

大山 竹二……一二九

歌麿の頃から女鶴を折り

岸本 水府……一四八

梅一輪追放の師の部屋に咲き

岩崎 柳路……一五四

え

演壇のポーズで被告席へつき 菊沢小松園……五五

演習が来ては董を踏むでゆき 竹久 夢二……一〇四

英語でしゃべり日本風に笑い 早川 清生……一六九

お

俺に似よ俺に似るなと子を思い

麻生 路郎……一〇

思い出の橋ばかりなり水都祭 麻生 路郎……一四

大阪は轢れかけてもよい所 高橋かほる……一七

おき宗に岡部伊都子が草履振る

服部明陽軒……二〇

おおそうか今日は夕刊来ぬ日なり

浅井 五葉……二二

お守りの腰もかわいい七五三 高橋 操子……二八

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

西尾 栗……二八

恩のある人の娘をきらい抜き

清水 白柳……三七

お祈りをする黒髪の長さかな

北川 春巢……三八

女なる悲しみおんな酌をする

西村 梨里……四〇

男皆阿呆に見えて売れ残り

山川 阿茶……四五

恐ろしい夢のふとんを叩き干す

岩田 美代……四六

奥さんは乍末筆だけのひと

福田 妄夢……四八

お化粧を直して女また他人

田中桂太楼……五六

お月さんさんねんながら負けました

須崎 豆秋……六五

応接間の金魚逆立ちしてみせる

西尾 栗……六六

お身ぬぐい大仏様のお手に乗る

高橋 操子……七一

降りる客いとのんのと続くなり

須崎 豆秋……八四

大阪城汚職のビルを覗みつけ

宮園射月芳……八四

老いて尚桜かなしや花盛り

宮尾あいき……一〇一

大阪に花の里あり通り抜け

本田溪花坊……一〇二

大物の器でないと酌いで知り

野呂 右近……一一二

おしっこが溜りたまつた犬の声

有信新之助……一四

落ちそうな椿に言葉かけて行く

岩田 美代……一五三

男みなもしゃくくくと悼みけり

石田 沐天……一五八

お花晶の優しさも抱き一万尺

吉岡 規子……一六八

か

牡蛎船が待ち草臥れた眼にうつり

近江 砂人……八

勝馬に今日の騒ぎが腑におちず

福井野迷路……二六

家族湯へ大阪からの電話です

大坂 形水……二八

患者の屁医者は黙って脈を取り

矢谷詩腕郎……五〇

かくれんぼ誰も探しに来てくれぬ

墨 作二郎……五九

雷のお詫びのように虹の橋

榎本 聡夢……六一

可愛らしい目になって来た酔うている

中島生々庵……七〇

河童起ちあがると青い雫する

川上三太郎……七一

釜めしをよそうやがては人の妻

岩井 三窓……七四

柿の木に河内訛の子が一人

堀口 塊人……七六

顔見世の東は東西は西

食満 南北……七九

棺桶に入った様な仕舞風呂

足立 春雄……八五

鐘がひびかぬ大都市の淋しさよ

麻生 霞乃……八七

風邪ひいて学者いよくジジむさし

かの子には一平がいたながい雨

懐炉まで入れて重役のみに行き

時実 新子……九五

河童同志愛の言葉は泡になり

伊藤 愚陀……一〇九

かみなりおやじ独りにされて飲んでいる

傍島 静馬……一一三

夏期講座みな居眠りに来てるよう

市場没食子……一一七

がらあきの電車に座る好きな場所

梶原 溪々……一一八

籠の鳥空の高さがこわくなり 青木 三碧…一二〇
輝くや元より金に嫁せし身の 井上劍花坊…一二四
かぶと虫死んだ軽さになっている

漢薬の匂いおならに出て寂し 若本多久志…一三二
勝ちいくさ幕がおりてもむなしかり

大山 竹二…一二五

天正 千梢…一三四
賀状書くスピード落し思うこと

宮田 不二…一三九
陰口の火鉢へ坐るところがなし 片山 雲雀…一四九

き

北浜に友あり退職金近し 金泉 萬楽…一二二

金魚屋に舞妓たもとを教えられ

長崎 柳秀…一三三

救急車うちの子供はうちにいる

富士野鞍馬…一七

銀髪になったら着たい色があり

本間満津子…四二

君見たまへ蒔蓑草が伸びてゐる

麻生 路郎…四七

教壇を捨て、儲ける気にもなり

福田 丁路…五九

凝固せる被爆の石を教材に

辻 蝸牛…六三

謹厳の彼も人の子プラスなり

布施 筑川…六六

君が代をきいてるような菊の花

木村小太郎…七八

銀行が夢という字を使いすぎ

山田 菊人…八三

気晴らしに来て泣かされる新喜劇

中島 小石…一〇三

銀行のカメラに向かってハイチーズ

田形 美緒…一一九

君などは悪貨の一人流行るべし

長谷川一徹…一二五

今日からはお前といふぞ俺といふ

石崎 洗塵…一三一

如月や江下北川作江たち

高杉 鬼遊…一五二

鏡台に嫌いな刷毛と好きな刷毛

武内 紅子…一五六

希望ヶ丘に当然お年寄りもいる

岩井 三窓…一七〇

熊野灘鯨が見える母の背 岸本 水府……五四
草市ではかなきものをね切りつめ

古川 柳……六四

来る年へ自愛のマスク大き目に

西出 一栄……八七

口づけの顔ともとれる水仙花 大峠 可動……九四

勲章をくれる悪いことしないのに

櫻谷 寿馬……一三〇

草の芽が出たぞおしっこさせながら

橋高 薫風……一五二

け

源聖寺坂織田作が出てきそう

早川 清生……一〇

袈裟衣脱げば毛脛の凡夫なり

若本多久志……二一

啓蟄の虫より先に代議士め

若柳 潮花……四四

原爆砂漠恥毛を蠅に晒されて

中津 泰人……六二

建国祭寒の卵に血がまじり

橋高 薫風……九三

稽古屋の猫は扇子でたたかれる

若柳 潮花……一四

減税の期待は春のシャボン玉 広瀬 反省……一六一

こ

恋人の気弱へピアノぐわんと打ち

中尾 藻介……七

子猫ぞろぞろみな宿命の顔かたち

中島生々庵……八

煌々とすしがぎょうさん売れ残り

須崎 豆秋……一一

子が出来て川の字形りに寝る夫婦

古川 柳……一三

公害を吐けとは仁徳のたまわず

八木摩太郎……一九

古稀過ぎて働く私へ税が来る 丹波 太路……三八

ことさらに雪は女の髪へ来る 岸本 水府……四一

恋せよとうす桃色の花が咲く 岸本 水府……四五

子のカメラ俺と女房を引つつかせ 大鶴 喜由……五三

児が追えば鳩は歩いて逃げるなり

須崎 豆秋……五三

子よ許せ原爆受けし母なれば 石原 晋子……六二

甲子園夏が終った赤トンボ 小浜 牧人……六七

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

麻生 路郎……八一

恋すでに手乗り文鳥ほどの仲 安井 蜂呂……九四

子を産まぬ約束で逢う雪しきり

森中恵美子……九五

五体投地罪がとび散る音なのか

片岡つとむ……九六

孤独地蔵花ちりぬるを手にうけず

川上三太郎……一〇一

恋人の膝は檸檬のまるさかな 橘高 薫風……一〇五

こんな時えらい坊主も出んかいな

須崎 豆秋……一二二

公園の裸婦に陽の刑雪の刑 藤田 泰子……一五〇

コーヒーをごくりごくりと飲むべからず

杉田絵巳子……一五八

ご主人をとりに行くよと仲が良し

大谷 弘平……一六〇

光頭会髭は大事に大事にし 小西 無鬼……一六六

恋人の坐ったとこへ坐って見 須崎 豆秋……一七〇

さ

酒とろりとろり大空のころかも

麻生 路郎……二二

雑談の前にお布施がさらされる

麻生 路郎……四八

三流館夫婦仔犬を抱いて来る

不二田一三夫……四九

桜なら堺刑務所今見頃

川村 好郎……五一

財布ぶっちゃけて負けさず銭を読み

金井 文秋……五五

酒の味鯛茶の味の春思う

太田 茶人……一〇六

三尺の机広大無辺なり

村田 周魚……一〇八

盛り場をむかしに戻すはしひとつ

食満 南北……一一五

作家の妻いつも背中へ話しかけ

不二田一三夫……一二九

参政権女は諸の方がよし

戸倉 普天……一三九

さびしさはこの花道のあのあたり

松本 波郎……一六四

し

敷のしの重しとなっただけで暮れ

武部 香林……二〇

市電に生きてたなきがらが酔う

児島与呂志……三〇

新大阪ホテルをぬけて立飲屋

岸本 水府……三一

尉は古稀媼は還暦わか緑

中島生々庵……三五

心ブラをした日に猫の鈴を買う

安井 久子……四〇

実験例3日本国漁夫とあり

岩井 三窓……四四

春日遅々として仁王さんねむくなり

清水 白柳……四九

しなびても土筆袴はつけて居た

真鍋 一瓢……五〇

十字架がおかまの胸に垂れ下がる

西川 晃……五一

死んだふりして蜘蛛よ淋しがらすな

奥村 丹路……五四

主審受けつけず流れる雲を見る

高木幸太郎……五四

知ってるかアハハと手品やめにする

梶元 紋太……五八

蜷の實臍に似ている人の臍に

川上 日車……六六

色即是空スプートニクが飛び

河相すゝむ……七〇

四季の花咲かせ一軒立退かず

黒川 紫香……七三

十二月パパと言われて油断せず

本多 柳志……八〇

死ねば死ねそうに女と七日居る

前田 雀郎……八一

社用から遊びの癖がつきはじめ

榎南 夏六……八四

十二月わが足音があるばかり

桑原 狂雨……八六

四月馬鹿チャッカリ夫人ひっかかり

寺井のり子……九九

しがみつくほどのこの世でなかりけり

麻生 路郎……一〇五

首相また新装開店するつもり

佐野 白水……一〇六

しきたりも私までよとお燈明

中西 明子……一二〇

神経を抜けば地獄のおもしろさ

戸田 古方……一二一

姑の尻をひったので気がほどけ

古川 柳……一二四

自分すら救えぬ人の立候補 麻生 路郎…一三〇
数珠持つてするパチンコの高野山

八木摩天郎…一三四

受話器まで毛糸でつつみ冬支度

榎本 聡夢…一三五

十二月まがりくねったとこで飲み

麻生 路郎…一三七

所得倍増よせよせ酒がまずくなる

魚住 満潮…一四〇

少女祈るエスさま風邪をひかぬよう

林 夢虹…一四二

師走風手にも持たぬさびしさよ

杉田絵巳子…一四二

出世してみれば半生傷だらけ

生島 鳥語…一五三

新劇に酔うて肥後橋桜ばし

磯野いさむ…一五七

三味線がやんでそれから音もせず

中島 小石…一六二

写真屋が飼うてるような奈良の鹿

神谷娯舍亭…一六四
戸田 古方…一六五

す

据ひいて立てば芸者の壮麗な 奥村 丹路…三七

涼み船水の深さをききたがり 麻生 路郎…六三

住み佗びて尚灯のともる戎橋 河村露村女…七〇

スピーチを考えながらテキを切り

麻生 路郎…七四

水栓のもるる枯野を故郷とす

河野 春三…九八

砂煙の中からホームインの顔

岡井やすお…一一八

鈴虫は身受身売はきりぎりす

木村半文銭…一二九

せ

聖書一冊菊一輪の二階なり

麻生 路郎…二四

静物画いくさの日にも世に媚びず

磯野いさむ…二六

税重く落日人を嘆かしむ

岡橋 宣介…四六

税務署と聞いて蠅取紙を踏み

吾郷 玲人…五七

税務署で冗談をいう出前持ち

高杉 鬼遊…七五

咳一つ聞えぬ中を天皇旗

井上剣花坊…八六

膳に坐し杖をつくよに箸をつき

藤村 青一…八六

正義なら何故マスクする中核派

塩満 敏……九六

税金をさうか／＼と払うた夢 水谷 鮎美……一五一

政治屋に悼まれている博徒の死

西川 晃……一五一

そ

ソロホーマー天の一角稲光 近江 砂人……一二

祖国脱出は難し流木の沈む部分

河野 春三……三〇

葬式で会いポロいことおまへんか

須崎 豆秋……四九

その上に謡の会も十二月

生島 鳥語……七九

染違い極月二十八九日

西田 当百……八七

ソプラノが一人まじってお念仏

安藤寿美子……一五七

その傷を待ってたように吹き出す血

高橋 古啓……一五九

その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ

麻生 路郎……一六五

そも／＼の嘘の初めのゴム乳豆

奥村 丹路……一六六

それだけの葉をアンタのむのかい

神谷凡九郎……一六八

た

台風の針路は敵の来るに似て

白石 大観……一八

旅役者誰の位牌か一つ持ち

西田 当百……二七

魂が抜けた楽屋の文五郎

安部 光子……二九

筍は竹になるとは知らなんだ

西尾青一路……五二

颱風の街へやっぱり渡り鳥

神谷凡九郎……六七

鯛ちりの骨飛行機が落ちたよう

川上三太郎……九一

旅びとは山を見つける戎橋

木下 愛日……一〇九

立ち話素足も築地明石町

近江 砂人……一四

企むや身のすみずみに螢棲む

時実 新子……一五

大仏の鐘杉をぬけ杉をぬけ

浅井 五葉……二二

竹槍におむつを干してよい天気

西垣 錦風……二二

足袋少しきつく女は旅に出る

正本 水客……三三

誕生日飲んで喋ってみな帰り

笠原 吸江……三三

たわし二個すり減り一年めぐり来る

内藤きさ子……三六

黄昏でなく夕映えの日を希う 田中 正坊…一四三
立ち呑みでころして帰る腹の虫

飯田 悦郎…一四八
煙草一本最敬礼をして乞われ 魚住 満潮…一五一
たばこの火つけてまだある妥協性

房川 素生…一五五
竹槍は切り落しても元の槍 古川 柳…一六七

ち

力ある眉をうつした日本刀 岸本 水府…七三
地方版僕の句もある日曜日 山田 季賛…八〇
鎮魂の松杉桜桜よし 橘高 薫風…九五
貯金箱またひき潮となりはじめ

麻生 蔑乃…一三〇
長針から見た短針の怠けもの 米浪進之助…一六六

つ

通天閣がまっすぐ見えてめしの店

三好 美芳…九
燕はぼん字のやうにとんで行 古川 柳…一五
綴り方貧しき父は母を打つ 岩井 三窓…一六
鼓うつ万才消えて秋淋し 服部明陽軒…三〇

吊皮も西成線は油ぎり 後藤 梅志…六七
妻の留守合せ鏡をして見たり 水谷 鮎美…一〇二
妻に字を聞いて知ってたことがなし

中尾 藻介…一三八
机拭いてわれに聞かせる言葉あり

木下 愛日…一四二
月のかさめぐり逢わねばただの暈 時実 新子…一七〇

て

手と足をもいだ丸太にしてかへし

鶴 彬…一九
電光ニュース大大阪が甦り 近江 砂人…二四

電柱は都へつづくなつかしさ 岸本 水府…一六
天守から昔殿様見た桜 若本多久志…一五七
父無し子強い男に憧れる 納 糸葉…一六九

と

土瓶から茶が出る嘘もすこし出る

川上 日車…一八
友達をみんなだまして南に居 麻生 路郎…二二
年上の女とくぐるてっちり屋 菊沢小松園…三二

年の瀬や夢買う列のくろぐろと

黒田 草舟……三六

泥棒の逃げた窓から首を出し

菊沢小松園……六四

父ちゃんが叱られたのをふれ歩き

木村 水洞……九七

飛梅やしんじつ恋はおわりたり

宇佐美和子……九七

図書館のシミで前途を語り合い

後藤 梅志……九九

遠く来て信濃に山のない日なり

麻生 路郎……一三

動物園みな就職をしてるなり

福田山雨楼……一五

獐猛な兵士はいらぬ自衛隊

谷垣 史好……二一

通せんぼ少年すでに恋ごころ

安井 蜂呂……二三

闘病の悲しきフアッション寝巻ショー

上西セツ子……三二

友だちは男に限る昼の酒

岸本 水府……三八

突風へマルビル廻りそうにたつ

江口 度……四一

古川 柳……四三

ときすでに九回裏のスペンサー

堀口 塊人……四九

党内で選挙合戦全国区

岡井やすお……六一

当選にバツタの姿思へかし

麻生 路郎……六二

な

長崎は初旅にして磯につく

岸本 吟一……二五

なんと虫かたと仲がなおりかけ

食満 南北……六九

長かった短かかったと夏休み

河井 庸佑……六九

名は忠孝全国指名手配なり

魚住 満潮……七五

何気なく買ったくじなら当りそう

鵜飼 蟻朗……八三

泣いていてふっと手すりの面白さ

食満 南北……一〇六

七草をバイクにつけて淀の秋

羽原 静歩……二六

長靴の中で一びき蚊が暮し

須崎 豆秋……二六

永い夢とお忘れ下され候かし

竹久 夢二……四三

内職に藤色があるたのしさよ

内藤きさ子……六一

直された癖で謡っている謡 後藤 梅志…一六五

に

二階を降りてどこへ行く身ぞ 麻生 路郎…二四

二人羽織顔は大平手は田中 柏原幻四郎…二九

鶏の何か言ひたい足つかい 古川 柳…三六

人間ドック合間くゝに妓が訪ね

井上 湧三…五六

二人三脚すめば何でもない二人

上野山東照…七二

にぎりめし母の祈りのかたちして

小出 智子…七五

にじりよる様に近づく十二月 西森 花村…七九

日本の童話かたきを討ちたがり

延原句沙弥…九七

日記書き終えると昨日の事になる

神前 阿字…一〇八

二三日新聞も見ず遇うていた 川上 日車…一三一

ぬ

ぬぎすててうちが一番よいという

岸本 水府…六二

ね

寝転べば畳一帖ふさぐのみ 麻生 路郎…七

値切つてる妻を離れたとこで待ち

川村 好郎…一三六

寝入ったも起きたも駅の名で答え

近江 砂人…一三七

寝くたびれいろは送りをくり返し

花月亭九里丸…一五六

の

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ

麻生 葭乃…一五

蚤にも喰わせず天下もとらず 西尾青一路…一二七

は

阪急が見えて旅から帰ってき 正本 水客…一一

花火黄に空の重心全く西 大山 竹二…一四

春だソレッツ記者は動物園へとび

早川 清生…四三

晩飯に来いと岡山から電話

大坂 形水…四七

花生ける花のころもなびかぬ日

藪内千代子……五〇

母の鐘子無し夫婦も聞いて寝る

神谷娛舎亭……五三

バケツリレー原発室で甦る

古川 鶴声……六八

万巻に通じて恋はうぶなりき

尾崎 方正……七七

発明の最後は地球吹っ飛ばし

深野 吾水……九三

花曇り二度目に會へば酔うてゐる

橋本 緑雨……九九

花祭り釈迦は六時を指し給う

上田 芝有……一〇一

母一人子ひとり母の好きなもの

片岡つとむ……一〇三

春雨へ女房と濡れるあほらしさ

川村 好郎……一〇四

張り替えた障子の中に母います

西尾 栗……一〇七

初蚊帳の中はシャツ着たキリギリス

麻生 霞乃……一一六

墓やや傾きてありぬ涙流るる

清水 白柳……一二〇

羽子板にまだ生きてゐる成駒屋

木村 十悟……一三八

埴輪楚々時の帝に殉じた目 片岡つとむ……一五〇
パトロンが帰ると猫が戻つて来 傍島 静馬……一五〇

春うらゝはさみほうちょうかみそり研ぎ

須崎 豆秋……一五九

はやり風十七屋からひきはじめ

古川 柳……一六〇

ひ

肥前肥後踏絵に暗き灯がともり

松本 波郎……二五

ひれざけはしのびあう人待つ酒か

近江 砂人……三六

人恋えばあわき彩もつ難あられ

森中恵美子……四三

人のいるとこへ病人座りに来 片山 雲雀……四八

日の丸よしゃんと立てればしゃんと立て

林田 馬行……五二

引金に指掛けたまま説く平和 麻野 幽玄……六八

ひんぬいた大根で道をおしへられ

古川 柳……七二

ひとり来てふたりで来たい浪の音

小田 夢路……七六

百両をほどけば人をしさらせる

古川 柳……八二

表面は茶の会にして両巨頭

中島生々庵……一〇〇

ひとかけの骨も納めず原爆碑

杉 久美枝……一一八

一人去り二人去り仏と二人

井上 信子……一二四

貧民窟神様の誤植でした

西川 晃……一四〇

人はひとおれは俺だが和にしかず

岸 南柳……一四八

膝の犬これが獣であるものか

中尾 藻介……一四九

人恋し人煩わし波の音

西尾 栗……一五六

表札に書いて我が名に一寸惚れ

中島生々庵……一七一

灯の色がはたちではない戎橋

岸本 水府……一七二

ふ

二人づつ二人づついる中之島

武部 若菜……二〇〇

古本屋美味求真がやっと売れ

後藤 梅志……二七

福寿草松にしたがいそろかしこ

麻生 霞乃……三五

ふるさとのあのポストから来た手紙

堀口 塊人……四二

ふるさとの駅真っ正面に城

久保田以兆……四三

浏を這いあがる女は突き落とせ

浏を這いあがる男は見ていよう

時実 新子……六一

ふるさとは大仙陵のあるところ

八木摩太郎……七六

振り向いた首振り向いたまま落ちる

板尾 岳人……八二

福は内落ちつく家にあらねども

青砥 可明……九一

孵卵器で生れ産卵機で果てる

川口 弘生……九二

風鐸に風がある日の法隆寺

片岡つとむ……九三

仏壇の姑が気楽さ笑ってる

神夏磯道子……一五二

へ

別宅に置くのは最新式テレビ

荻田千代三……一四七

ほ

頬冠りの中に日本一の顔

岸本 水府……七

放浪の町に七夕竹が揺れ 神谷娯舎亭…… 八

法善寺一皮むけてめぐり合い 桑原 狂雨…… 九

凡聖一如元旦のころ知る 麻生 路郎…… 三五

骨立てたまま二次会へついて行き

須崎 豆秋…… 三七

本棚へ衣食削ったのを並べ 市場没食子…… 三八

ほととぎす節季を逃げて来た男

魚住 満潮…… 六〇

鬼灯は亡母よ亡母よと赤くなる

高橋 夕花…… 六四

凡人の幸せ明日をうたがわず 木幡 村雲…… 一〇〇

防音壁ばかりで囲む田植村 藤本七曜子…… 一一〇

煩惱は裂けし柘榴に極まれり 吉岡 美房…… 一三一

ホテルにはあらずネオンの曾根崎署

石井 黙平…… 一四一

ホンコンで遊んだ月賦まだ払い 高橋千万子…… 一四七

ぼんぼんは紙の裏表も知らず 北川 春果…… 一五三

ポスターにない故郷を愛すなり

中尾 藻介…… 一五五

北斎の掛けぬ演習富士裾野 松尾柳右子…… 一五八

抱擁の目のはしに入る天守閣 谷垣 史好…… 一六一
保津川を下るひとりの労働歌 松田 巖…… 一六三

ま

〇トレルマデカエルナと部長から

川村 好郎…… 二三

マイナスになる酒じゃとて酒じゃとて

真鍋 一瓢…… 三一

待ったなしの歩にさされたる犬養毅

麻生 路郎…… 五五

まぼろしの捕虜がつらなるいわし雲

伊東 静夢…… 七一

万年床車庫入りの様すべり込み

西森 花村…… 七七

満開の花に誘われ修羅出土

香川 酔々…… 一〇〇

末法の世の新聞をたたみけり 安藤寿美子…… 一二七

マスゲーム時代はあなた達のもの 芝原 路春…… 一二八

み

見習いのホステス酌いばかりいる

阿萬 萬的…… 四〇

みな人のすることゆえに壁面燃ゆ

木下 愛日……四一

御堂筋巾見なおしている夜明け

清水 望峰……五八

みな呑んでるぞビールが散るぞ夏

麻生 路郎……六三

南座を舞妓焰のように出る

若柳 潮花……八〇

皆咲けば百花繚乱妻の庭

相元 紋太……一〇二

見渡すとユダのころをみんな持ち

麻生 路郎……一〇八

水芸の水は乱れず拍手鳴る

大高 角嵐……一七

みんな皆笑顔でみんな皆他人

岩田 美代……一三三

三越の商品券を陽にすかす

高杉 鬼遊……一三六

身を深く持つ天皇と同一年

藤島 茶六……一六三

む

昔堺に男ありけり夏まつり

食満 南北……一一

胸の花はずし自分をとりもどす

山田 菊人……一三九

迎ひ酒時に孔子はどういうた

川上 日車……一七一

め

メガホンの同じ穴から民主主義

武部 香林……二二二

眼を入れたダルマにやっと静もどる

宮西 弥生……二二七

盲いたる人花愛でて花散らす

野呂 右近……二二七

滅亡の地球に残る蝶一つ

吉川雉子郎……一三四

眼が覚めりゃ丁度映画は済んだ処

西森 花村……一三五

険を閉じて過去ふりかえる霧の庵

西村句楽坊……一三五

明治百年漱石しずかに売れている

伊藤 定子……一三七

も

黙禱へ日本海の波の音

坂口 芳一……九

門標に竹二としるすいのちかな

大山 竹二……二五

もう未練ないが糸屑とってやり

麻生 路郎……三九

もう一人診ないと米の買えぬ医者

河村 瑞川……三九

モンロー忌聖なるものは遠くなる

中尾 藻介……六一

モーターよ労資何れに味方する

住田 乱耽……一〇九

もてたこと妻へ話して笑われた

西 いわを……一一〇

もう六十まだ六十と紅を引く

柳原 静香……一六八

や

柳原涙の痕や酒の汚染

吉川雉子郎……一七

山々の姿も平家物語

岸本 水府……二二

病みつきし印象だけの古曆

西出 一米……四二

野球拳女に紐の多いこと

山本 一途……四七

やわく／＼とおもみのかゝる芥川

古川 柳……五九

役人の子はにぎ／＼を能覚

古川 柳……八三

役人のほねっぱいは猪牙に乗せ

古川 柳……一五五

ゆ

雪国の赤いポストを探し当て 三条東洋樹……四一

行末はどうあろうとも火の如し

麻生 路郎……四五

郵便はまだか箒目美しい

藪内千代子……二八

よ

四ツ橋で見て来た屋座見つからず

川村伊知呂……一九

寄席の灯も大阪の色京の色

桂 枝太郎……三一

予算だけミサイルを撃つ自衛艦

栗林 光夫……四六

佳き友よ我れ亡きあとも噂せよ

阪口 愛舟……五七

羊羹をいただいてると地震かな

須崎 豆秋……一〇五

よく泳ぐ妻は他人のように見え

山本 一途……一九

ら

ラッシュアワーわたしのお乳どこへいた

山川 阿茶……一六

落城の濠に浮いてる吾妻形

古川 柳……九四

り

リキュールの中のふらんす小咄よ

森中恵美子……一二三

臨終が冬ならいろはおくりで逝かんかな

麻生 路郎……一五四

れ

れんげ菜の花この世の旅もあと少し

時実 新子……一〇四

ろ

六角堂幾何学的に暮れて行き

笠原 路生……二七

労働歌重役室の窓閉まる

河村 日満……五二

ローマからハガキがとどく仲直り

近江 砂人……五六

老人におもちゃなしバラの前に立つ

麻生 路郎……五七

わ

ワンマンカーやもめ暮らしに似ておかし

麻生 路郎……六八

割箸で名指しをされる平社員

松江 梅里……八一

割勘のもつれヘレジの無表情

高橋千万里……一〇三

わだかまり酒でもつれて酒で解け

西田柳宏子……一三三

私にもどる机にもどる雨の午後

高橋 夕花……一六七

追記

「なにわ川柳この一句」を朝日カルチャーセンターから自費出版したのは昭和五十八年で、はや十五年ほどの歳月が流れた。

このたび旧著にもう一度接して、よき川柳の味をたのしみたく、再版を希望する人たちの声が、やはり朝日カルチャーセンターの教室から起こり、内藤壽一さんがその実現に労を惜しまず尽力してくださることになった。

なにしろ二十年前の取材だから、中には世の移り変わりの激しさに、データに関する内容など大きな齟齬もあるであろうが、一切補筆は致さなかつた。

若い日の未熟な鑑賞が気恥ずかしく、壽一さんの背後から、そつと覗いて就いて行くような気分である。

まことに感謝あるのみで、多くの方が川柳の味に親しんで頂ければ望外の仕合わせである。

平成十一年二月

橘 高 薫 風

なにわ川柳この一句

定価 一、〇〇〇円（旧価格）

発行 平成十一年三月二十日

著者 橋 高 薫 風

豊中市中桜塚三丁目二三番一五号

印刷 日新印刷有限公司

大阪市北区南森町二丁目四番三三三号

電話 〇六一六三六一―六四三七

FAX 〇六一六三六一―一六四五